

エゾバツ



2011 冬季号 95

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

95号

- 1 巻頭言 自然保護思想の普及と啓発
(ボラレンの活動目的について) 会長 春日 順雄

- 2 自然観察会など
 - ・サステイナブル (持続可能) 社会をつくれるのか 札幌市 原田 和彦
 - ・旅立った小鳥 // 牧 茂
 - ・命育む野幌と「人命軽視」の中国に想う // 浅見 文貴
 - ・松倉岩を訪ねて 小樽市 窪田 稔
 - ・枯れ葉と戯れ、坂の街小樽を歩く // 輿水 慶子
 - ・円山登山林観察会 札幌市 吉川 茂子

- 3 調査・研究報告
 - ・二風谷ダム湖の沖積世と湖畔の植物 平取町 川村 桂介
 - ・自然について——外来植物を通して見た野幌森林公園の自然、
北海道の自然 事務局

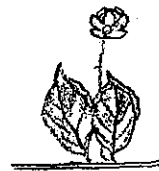
- 4 連載
 - ・ゴミムシのこと 苫小牧市 谷口勇五郎
 - ・<北の芸術家シリーズ>② 坂本直行さん 広報部

 - ・本の紹介 鷺谷いづみ「<生物多様性>入門」 //

- 5 自然観察「NOW」 5, 6, 7, 8号
「自然ふれあい交流館」との共催事業で、市民のみなさんにわかりやすく季節にあった自然情報を提供

6 役員会 報告

<編集後記>



自然保護思想の普及と啓発(ボラレンの活動目的について) 春日 順雄

沢山の自然保護団体が様々な場面、領域で活動をしています。活動内容は多様でしょうが、荒涼たる宇宙の中で人間をはじめとして沢山の生物が住んでいるオアシスの様な地球。その地球(Only one Earth)が危ない。自然保護活動の方向づけは、かけがいのない地球—Only one Earthを守ろうの考えでまとめることが出来るでしょう。

北海道ボランティア・レンジャー協議会(略称:ボラレン)の活動目的も会則2条に「自然保護思想の普及啓発」と書かれています。「自然保護」は、使い慣れている言葉です。あまりにも当たり前すぎて、「分からない」などと言ったら、なんで今更なんて叱られるかもしれません。しかし、自然保護活動とボラレンの活動がどう繋がるかは、いつも我が脳裏を駆け巡る大きな課題でもあります。

ボラレンの活動は大きく二つに分けられます。

一つめは、自然に直接に働きかけ、自然保護思想の普及と啓発を実感する活動です。これは、自然保護活動をしているという実感があります。

昨年、11月7日「秋のありがとう観察会」の始まりの挨拶は、「自然保護」と紙に書いて、「今日のゴミ拾いは、自然保護活動の一つです。ゴミを拾うことは、自然をあるべき姿に戻すことですから。」という話をしました。セイヨウオオマルハナバチ防除とオオハンゴンソウ防除も、自然をあるべき姿に戻す活動ですから、自然保護活動をしていることが実感できます。なかでも、オオハンゴンソウ防除は市民参加型を目指しましたから、自然保護思想の普及と啓発を目的とすることが実感できた活動でした。

二つめは、ボラレンが一番力を入れている観察会の案内をすることです。

自然観察会は、“自然保護思想の普及・啓発”の場です。

ところで、自然観察会の案内をしていて自然保護活動をしているという実感を、お持ちでしょうか。浅学非才な私は、そここのところの整理ができていなかったのです。

よく考えてみますと、自然観察会の案内の場は、ボラレンの目的とする“自然保護思想の普及・啓発の場”なのです。私の場合は、自然観察会の案内に臨んで、そここのところのおさえが極めて希薄であったのです。猛反省です。

自然観察会の案内を受けた人たちが自然の美しさや素晴らしさに気づき、自然保護活動に理解を示し、実際に活動をする。このような筋書きの中では、ボラレン会員は観察会参加者へ自然保護活動への橋渡しの役をしたことになるでしょう。孫悟空の分身の術のように自然保護活動の理解者が沢山誕生しますから、強力な手段なのです。自然観察会の案内はれっきとした自然保護活動であり、“自然保護思想の普及・啓発”の活動なのです。

そこで提案。(もう既にやっているぞ!の声が開こえそうですが)私自身の自戒の思いを込めて、

“自然保護思想の普及・啓発”の場を意識した自然観察会をしましょう。

自然保護思想がどうのこうのという論議はしない

大まじめに考えますと、立ち足るののは「自然保護思想」のとらえ方です。これは、真面目くさって考えたり討議したりすると、奥深い森に迷い込んで脱出不能になるような

代物です。これこそ、前号から述べているかけがいのない地球「Only one Earth」を守る、の考えでいきましょう。

ボラレンの普段着の観察会の中で

“自然保護思想の普及・啓発”を取り立てて説明するような観察会の形は避けましょう。素晴らしい自然現象にふれたり、草木や昆虫や鳥などの解説の中で、さらりとやってみましょう。つまり、“自然保護思想の普及・啓発”は、今までボラレンが努力してきた、いい案内人になろう、いい観察会を実現しようという方向性の中で、自然保護的に説明ことをいくつか設定する。そんなことでいいでしょう。一番大切なことは、案内者も参加者も自然を楽しむことです。

このような実践の中で、会員一人一人が自然観や自然保護に関する思いを深め、それぞれが自分らしい香りのある案内者に成長していきましょう。

いくつかの文章の紹介

『その頃の私は、各地で起こる自然破壊にひどく心を痛め、自然保護に並々ならぬ関心を持ちながらも、自然を守るとはいったいどういうことなのか、皆目見当がつかずにいた。

しかし、賢治は、そんな私の肩を、ぽおんと叩いて言ったのだ。「あのなっす、いっとう大切なことは、自然が私たちを養ってくれている、ということなのです。私たちが耕して農業をしたり家を建てたりしている大地は、自然からの借り物であんすから、木や草や、ほかの生き物たちとも、なかよく一緒に使わねば、わがねのす。それから木は、森からの戴き物であんす。森の許しを請うて、必要な分だけ戴いてくるものであって、決して我が物顔に伐り倒すものではないのす。」

もちろん私には、賢治が実際にどんな話し方をしていたのか、まったく分からないのだが、とにかくそんなふうに言われた気がした。』【「それぞれの賢治」(宮沢賢治のことです) 世界文化社刊・澤口たまみ文から引用】

再び引用です。2005年、富良野東大演習林研修の資料の中に知里幸恵さんの「アイヌ神謡集」の序文が載っていました。講師の宮本先生は、どんな気持ちでこの文を載せたのでしょうか。何も言いませんでしたが、何を、私たちに伝えようとしたのでしょうか。

『その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼らは、真に自然の寵児。なんという幸福な人たちであったでしょう。』

冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山を踏み越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白いカモメの歌を友に木の葉のような小舟を浮かべてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久にさえずる小鳥と共に歌い暮らして露とりヨモギ摘み、紅葉の秋は野分けに穂揃うすすきをわけて宵まで鮭とる簗(カガリ)も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円(マド)かな月に夢を結ぶ。嗚呼なんという楽しい生活でしょう。平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急速な変転をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に開けてゆく。』

サステイナブル（持続可能）社会はつくれるのか

札幌市 原田 和彦

生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が2010年10月名古屋で開かれたが、一体何が議論されたのか良く分からない。勿論、こちらの不勉強もあるのだろうが、生物資源取引にかかわる利益を、先進国側と途上国側とでどう配分するかという、利害関係の調整ということ以外は聞こえてこなかった。生物多様性を守るということは、地球環境を守るということであるし、サステイナブル（持続可能）社会を作っていくということだと思うが、その辺の議論が少しでもあったのかどうか。

サステイナブルといことを考えれば、人口問題は切り離せないと考えるのだが、手のつけようがないということなのか、人口問題の議論はあまり聞かない。

2010年11月26日世界の人口は、69億875万人で1日に22万人ずつ増えているという。このペースでいけば、あと1年ちょっと、2012年の1月には70億人を超える。

一体、地球上で何人の人間が生きていけるのか。地球人口が50億人程度の頃の話だったと記憶しているが、地球の定員がどれだけかという議論があった。地球の定員は、地下資源の使い方、食料の消費の仕方など生活レベルによって一意的に決まらないが、アメリカ人並みの生活ならば25億人、インド人並の生活ならば150億人という話であった。定員が150億人ならばまだまだ余裕があると言う事になるが、インド人の生活レベルも中国人の生活レベルも急ピッチで上がってきているし、先進国の生活レベルも下がることは考えにくい。その傾向は今後も変わらないだろう。

現時点では70億弱の人間が、大きな貧富の差の中で辛うじて生きている。人口が今のペースで増え続け、生活レベルが上がり続けていくなら、地球環境はサステイナブルではあり得ない。

日本では、江戸時代がサステイナブルな社会であったという。化石燃料に頼らず、食料の輸入もなく、太陽エネルギーのみで3千万有余の人間が生活していた。その意味で、日本国土の定員は3～4000万人ということになる。技術の進歩で多少は増えるだろうが、たかが知れている。地球全体の定員はどれだけか。生活レベルが急ピッチで上がっていく中では、70億人の人間はとても養えないと考えられる。

地球人口を抑えられるのか、生活レベルの上昇を抑えられるのか。先進国と途上国の差をどう考えるのか。

そういうどうしようもない所を考えるのではなく、自分たちの出来る所から手をつけるべきだ言い方もある。その通りには違いないだろうが、COPのような国際的な会議、地球環境のことを議論する場では、先進国と途上国との利害の調整ということだけではなく、もっと本質的な話し合いをして欲しいものである。

旅立った小鳥

牧 茂

晩秋のある朝、新聞配達をしている方が、傷ついた小鳥を連れてきた。私が毎日森の中を歩き回っているから、どのように措置すればよいか分かるのではないかとのこと。

見せていただくとムクドリ位の大きさで、足と羽根に傷がある。足と嘴の長さからシギ類と思われる。さて、どうしよう、早朝から電話で森の仲間である森谷氏に相談、いつも野幌の森でお会いする「野鳥の会」の松原様（江別市在住）にお尋ねすることとする。

松原様からは、このような傷ついた野生動物を受け入れてくれる、市が指定した江別市内の動物病院を紹介された。開院を待ち兼ね電話すると保護をした場所を問われ「厚別区」と答えると、当院では受け入れられないので、保護をした地域の指定医は「札幌総合動物病院」であると知らされた。

さっそく病院に連絡、森谷氏の車で伺うと、規模の大きな施設。このような場合、治療費などは札幌市に請求するので負担は無いとのこと、快く受け入れてくれました。

このような制度のあることを、はじめて知りました。

その後、幾度か様子を伺うが治療のかいもなく10日後に死亡とのこと、遠く南の地へ旅立の前であるはずが、別のところへと思うとなにかもの悲しく、いじらしさと、いとおしさを感じました。

しかし、保護をした時あの鳥は、大きさ（ムクドリ位）の割にはまるで中身が無いように軽かった。この鳥が、この小さな身体で何千キロもの旅をするのか、出来るものなのか、しなければいけないのか、その秘められた力はどのようにして得たのか、なぜ与えられたのかと不思議でなりません。

これまで、沢山の環境の変化に対応して生きてきて、得た方法と結果が、代々受け継がれ生まれながらの本能として備わったものでしょう。しかし、今地球規模の温暖化など、環境の変化の激しい時、彼らはどのように対応して行くのでしょうか。

でも、心配はいらないか、彼らはこれまで生きてきたし、これからも、生き残る術を身につけて行くことでしょう。仲間が無事でありますように祈るのみです。

命育む野幌と「人命軽視」の中国に想う

札幌市 浅見 文貴

この日、野幌の森で出合った方は、江別に住むご婦人であった。不思議なことに、人生を達観しているというのか、生きることに意欲を失ったような物言い。「私ね、いつ死んでもいいと思っているのよ。だって人間、寿命ですからね。「では、あなたの寿命は」とオオム返しに聞くと、「それがねえ、分からないのよ」。あたり前だろう。誰だって分かっているよ、そんなに苦労しない。そこで、ひとひねりして考えてみよう。いつ訪れるかも知れないお迎えと闘う勇気と元気、高齢長寿社会をどう生きるか。いつ死んでもいい、というご婦人の寿命論について思いをめぐらしてみた。

《 寿命は“天命”に非ず“人治”だ !! 》(1)

世界一の長寿国ニッポン。寿命は天から降ってくるものではない。しかし、ご婦人の寿命はどうも“天命説”、すなわち、自分の終命は天が決めるものと思っているらしい。

私の“寿命観”は自己責任の“人治説”を支持だ。医学の驚異的な進歩に助けられて、自己の徹底した健康管理が救命、延命を容易にし、その意味で自己の努力次第では寿命は自分の力で延ばすことができると思っている。

「私はね。酒が大好きなんです。でもいくら飲んでも、これでいいという定量感覚がないんですよ。困っています。もう仕事はないし、いつ死んでも。きょうだって（最後まで）18キロを歩けるかしら。心配なんです」。

野幌の空は予報を裏切って、午前中は快晴だったものの、大沢口の手前9時すぎにスタートした一行は、昼食を森林の家（登満別）で済ませ、疲れをほぐす健康体操もそこそこに、せわしいスタートになった。なぜか、いまにも泣きだしそうな雲量100、暗闇の空が怪しくなり、より近藤を急ぐコースの変更で、けもの道のアップダウンおびただしい狭隘路を一列縦隊でゴールをめざした。結果、18キロはほぼ8キロカットの10キロに短縮、道中ももっとも危惧した雷鳴まじりの沛然と降る雨が参加者を叩いた。まるでスコールさながらの気象激変を悟らせる天地の異相。秋が夏の猛暑で“神かくし”に遭遇したように、雪虫が林間に舞う10月は17日・日曜日”だった。

例のご婦人は、用意したポンチョをはおり、足取りも早く先導役のSご老人と先を争うかのように、大変な健脚ぶり。たぶん私が言った、あの一言をさっそく実行に移したような張り切りようである。

《 仕事は「病気になるない」活動 》 (2)

「あなたには立派な仕事があるじゃありませんか」。

ご婦人「なにもありません、と言ったじやないですか」。私はすかさず言った。「病気になるない、という仕事があるでしょう。健康管理こそ救命や延命に直接結びつきます。あなたがこうして森を歩くのも、自然を楽しみながら心身ともに鍛える仕事じやないですか」。

今年からはじめた野幌歩きも単なるヒマつぶしであり、お迎えが来るまでの“つなぎ”と考えていたご婦人だが、どうやら親からもらった尊い命、たった一回きりの人生を天命に寄りかからず、自分の努力でなんとかしようと考えたようだ。

ところで、17日と言えば、中国で尖閣諸島の船長逮捕をめぐる大規模な反日デモが国際社会をも揺るがした16日の翌日。「政冷経熱」という共産党の一党独裁体制下で急成長遂げる中国式資本主義が経済大国ニッポンを追い抜く、巨大領土国家の法治逸脱した蛮勇を目の当たりにする時、懐深い野幌での寿命談議は、なんと平和なことか。しかし、経済力が優位に立つても、果たして中国がニッポンの平均寿命を超えられるか、となれば難しい相談だろう。なにしろ比較、対象にするでデータが存在しない。そしてなによりも驚くのは約13億の人口も、1億単位で大きな誤差が生じるお国柄（道総合政策部統計グループ調べ）であることだ。もっとも、貧富の格差が都市部と地方では極端な開きが指摘され、ノーベル平和賞の受賞者が反日教育と同じく、政府が人民に敵視強要する特異な社会構造では、実数把握などは以前の問題。

《 人命軽視・中国に野幌観光のすすめ 》 (3)

背景には共産圏特有の人命軽視が横たわり、あの89年6月4日、天安門広場で起きた国の民主化を求める騒動で鎮圧に出動した軍隊が国民に銃を向け、大量殺りくした事件を知ると、日本人が地球より重い生命、とりわけ天安門の事件の話しを旅行先の中国で交わすとどうなるか、考えただけでも背筋に冷たいものを感じるだろう。

ちなみに天安門事件の犠牲数はいまだにナゾである。NYタイムズの報道では、400人から800人と推測、あれから20数年経った今でも、沈黙続ける中国政府に、NYタイムズの紙面末尾に死者が数千人かも知れぬと報じてた記事の行間に、私は生命への暗い闇を読んだ思い。そして日本領海を侵犯しながら、海保の巡視艇に挑発あて逃げを繰り返した“命知らず”の中国漁船。

野幌の森を雷雨に打たれ、爽快な疲れを帰宅の晩酌でさらに愉快的な気分にした私。つくづく野幌の平和な自然の営みに、はかり知れない感謝の思いが突きあげてきた。最後に、増えるばかりの中国人の日本への不動産増産買収と観光客、ぜひ、命を育む野幌の平和な自然の営みを観光し、日中友好の絆を深める一助にして頂ければ、これに勝るものはない。(22・11・5)

松倉岩を訪ねて

小樽市 窪田 稔

10月17日、北海道ボランティアレンジャー協議会小樽支部の、松倉岩登山観察会に加わった。天神浄水場前に8時30分集合。23名(内女性9名)の参加で、5台の車に分乗して林道を進んだ。穴滝から先は初めての道だった。

「土場」に車を置いて、秋晴れの中、落ち葉を踏んで歩き出した。さわやかな山の空気を存分に吸いながら…… ミズナラの大木が、ねじり曲がって立っていた。これまで、よくも伐採されずに残っていたものだ。ハウチワカエデが、葉の半分だけ赤く紅葉して目立つ美しさだ。説明では、秋、気温が下がってくると葉柄の基に「離層」ができ、葉で作った澱粉等の養分を幹の方に送れなくなって葉にたまってしまい、同時に組織が少しづつ壊れこれが他の成分を合成して赤い色素、アントシアニンを作る。その過程で太陽光線の多くあたる方から変化が進むので、まだら模様が見られるわけ、また、黄葉は、緑の色素の方が早く壊れ、黄色の色素が遅くまで残るためイタヤカエデ等がこれに当たる。アブラホは、白葉に。

道の両側は笹藪が続く。そして、落ち葉が砂利道を覆い、歩きやすくなる。崖崩れの所がある。イヌガンソクは、孢子葉と栄養葉が別になっている。ニガキの小枝をかんでみたが、さほどにがくないのは、何かの間違いか。樹木の冬仕度として冬芽の説明など、時々立ち止まって話があるので、疲れない、ベニテングダケあり。

「小樽峠」の案内標識板が持ち去られていた。小樽野草愛好会の会員たちが、作った物だという。残念だ。ドングリが三か所、散らばっていた。

松倉岩の手前500m位、竹藪が刈り取られて、道が作ってあった。誰がやってくれたのだろう。大岩を跨ぐ、エゾマツの大木に驚かされる。そして、石の間を登り続けて、頂上近くまでやっと辿り着く。711mである。下方に奥沢の町並が見えた。この尾根に重晶石の鉱床があって、松倉鉱山が、一時、国内の重晶石の大半を供給したそうである。

大岩の下で昼食となる。食べ終わると雨模様になったので、皆がその用意を始めた。こうなるとは知らず雨具を北原さんから借りた始末。持ってくるべきでした。12時20分下山へ。しばらくして、崖下の倒れた枯木に、クリタケ、ヒラタケ、ボリボリ、が出ているのを見つけ、何人かが採りに行く。雨が本降りになった。立ち寄る予定だった穴滝を通り過ぎて、解散することになった。

車で略、中間付近まで、(約5Km)乗せて頂いたことで、無事登山ができました。資料の紅葉カラー8枚は、現物のようで参考になりました。

クマの出そうな所で、私一人では行けない場所です。参加して、気持ちも晴れ晴れした感じです。ありがとうございました。

枯れ葉と戯れ、坂の街小樽を歩く

小樽市 輿水 慶子

11月7日、立冬。ほこほことした日差し中、軽装の女人たちが鳥居をくぐって、住吉神社に集まってくる。今年度最後の自然観察会、初めての市街地巡りが、金色のイチョウに迎えられるところから始まった。

「イチョウの雌雄が分かりますか?」と、佐々木師。「葉にきざみがあるのがズボン、ないのがスカート」「すくっと立っているのが雄、ずんぐりが雌」と私。「银杏が付いているのが雌だよ。触るとかぶれるよ」と、ある人。なるほど、誰しも納得いく見分け方だ。枝に付いている淡色の実は、産毛が生えた柔肌みたいで、ついつい手に取り匂いまで嗅ぎ、顔が痒くなった。

総勢 21 名、三々五々石段を上って、全長 5 キロのコースへと繰り出していく。石段の中ほどで振り返ると、鳥居がみつつも重なっていた。ひと吹きの方が、金色を花吹雪のように散らしていく。今日は秋色爛漫。

神社を後にしてからは、栗山公園でエゾノコリンゴの実を味わい、高橋農園前で、ヤマモミジの赤、黄、緑の染め分けに見とれた。庭を覗きながら歩道をとこてこ歩き、角を曲がって人家の脇道を進み、ホウノキ、ミズナラ、ハリギリ、イタヤなど、落ち葉をサクサクと踏み散らし、ひとしきり坂を上る。男の人を先頭に、学校のグラウンドを横切り、水道局の草原から眺望を楽しみ、坂を下る。

レンジャー北原師の土地感はお見事で、近隣の人でなければ知らないような、隠れ道まで探り当てていく。かねてから、野山を歩く師の姿は、まるでまたぎのようだと感じ入っていたのだが、市街地の隅々まで知り尽くしているとは、なんとも謎多き人である。

そんなことを考えているうちにも、どこをどう歩いたのやら、スウィットと小さな寺にたどり着いた。小樽では珍しい高野槇の大木と、真赤に色づいた紅葉に包まれた金毘羅大本院である。本堂でご住職のお話を伺い外に出、裏に回ると、穴滝八大龍王神と記されたお像があった。北原師がその由来をお内儀さんに尋ねたところ、かつてこの寺の尼さんが、小樽奥地にある洞窟、穴滝で行を積んでいたとき、龍王神の像を建立するようにとの、お告げが下されたそうだ。

今年の観察会は、2月の穴滝で始まっている。納会で、奇しくも穴滝にゆかりの寺を訪れるとは、何かのご縁であろうか。滝に打たれ勤行する尼さんを思い描くと、穴滝が私の知らない姿で生々しく息づいてくる。不思議な気分で、小さな沢を渡った。まるで結界から抜け出るかのように……。ヒヨドリが鳴いている。また、街を歩く。遠くに霞色の海が見えてくる。石垣にノイバラの赤い実、イボタの黒い実。邸宅の庭にプラタナス。そして桜の葉が、しんみりするほど赤い。「昨日見た公会堂の紅葉も、すごく奇麗なんだから」元気印の常連さんの言葉に押され、腹ペこの私は、最終地の小樽公園へと、どんどこ向かった。

その木は、真赤だった。なんとも世界は美しい。生かされていることに感謝して、
.....合掌。

円山登山林観察会

札幌市 吉川 茂子

少し山頂で風があっただけで晴れて天気にもぐまれてよかった。エゾリスと最初にあっただれかが「飛ぶんだ」と、感心したような言葉あり、前にも見ているのですが、あらためてそうなんだと感動して、何か不思議だなあと思いました。

木の説明、鳥の説明、虫の説明を、時々止まってしてくれました。ゆっくり登る事ができました。一緒に登った方が、ゆずりあって登ること事はいいねえ、と言っていました。あらためて私もいいなあと思いました。

キタコブシの花の芽と、葉の芽のちがいがきれいに見えてよかった。枝からのにおいがいいにおいでした。コブシ、モクレンの花が好きなのでよかったなあ、登って行くと途中で道のすぐそばの木に コガラ? ハシブトガラ? ゴジュカラ、ヤマガラ、シジュガラを見ました。かわいいですね、きれいですね、鳴き声もいいですね。ひたすら見いってしまう、聞きいってしまう、鳥の動きがまた何とも言えず好きです。

アイゼンを借りたのですが、自分流でひもをむすんでとれかかっては、少しなおして歩いてたのですが、親切に声をかけてくれる人がいて、最後にはひもを直してもらいました。その方は「この前の登山でアイゼンのヒモのまわし方を教えてもらったからと」、人の心の豊かさに感謝。この次私も教えてあげようと思いました。

登山のあと知人と円山動物園で食事をとりました。観察会のあと、お弁当を食べるのが楽しく、とってもおいしいのです。食後、知人と本を見て(円山動物園の本のコーナーで食事していたので)木々や小鳥、他をふりかえりをしました。一人ではあまりしなかったのですが、食べたあとゆっくりとあらためて見るのはまた楽しいものだなあと思いました。動物園でレッサーパンダの「ふん」入りの紙すきの行事に参加しました。「ふん」は殺菌されていると、試験に合格、うんがつくからと受験生にしおりをあげる分と自分の分を作りました。私にもうんがつきますように。

子供、大人、ボランティアの人と一緒に作りました。楽しい一日になりました。前日に下見して頂き、安全確認、他をして頂き、安心豊かに登山出来る事に、心から感謝します。

今回は休憩時間が少なかったのですが、山頂がせまく人がこみあっていたし、風が出てきたからと思います。暖かで少しゆっくり出来る時、山頂からの景色を楽しみたいと思います。

又、いろいろな人がいる中、説明が大事になるのだなあと思いました。帽子、手袋は安全のためにも必要と、あらためて私も自覚しました。ありがとうございました。

二風谷ダム湖の沖積地と湖岸の植物

～ 9ヶ月も水没させられる環境のもとで 生き延びに生き延びている植物たち ～

平取町 川村 桂介

1. はじめに

二風谷ダムは、沙流川総合開発事業として洪水調整、流水の正常な機能の維持、水道用水の供給、灌漑用水、発電を目的に造られた多目的ダムである。昭和57年に着工されて平成9年に完成した。湛水時の水位は48mであるが、台風や前線の活発な7～9月には42～40mまで水位を下げて調節し洪水に備えている。

このダムは沙流川の河口から約21Km程逆上ったところにあり、そこは幹川流路104Kmの全流域からみたらうんと下流域に位置している。下流域ということもあり、川幅も広がっており、上流域の山間部に造られている一般的なダムに比べて集水面積が広いのが特徴である。しかし、ダムの水位を下げる7～9月には、いつしかダム湖の中流域から上流域にかけて広い沖積地が現れるようになってきている。放水が始まると、湖の両岸から中央部に向かってじわじわと砂泥地が広がり湖面の4割位が陸化するのである。

ダムができてから10年足らずしてこんな状態になったのは、平成13年と15年に襲ってきた大型台風や18年の豪雨によるものであろうが、何と言ってもダムが沙流川の源流域から84Kmもの下流域に造られたそのことが大きな原因であろう。

沙流川は日高山脈の日勝峠近くに源を発し、途中、芽室岳、ルベシベ岳、チロロ岳等に源を発するウエンザル川、ペンケヌシ川、パンケヌシ川等と合流し日高町の市街地に至り、更に戸蔭別岳、幌尻岳に源を発する額平川等の支流と合流しダム湖に流れ込んでいる。また、ダム湖内の右岸からはルオマナイ川、タイケシ川、オボウシナイ川、オバラダイ川、トウナイ川が、左岸からはオサツ川、マカウシの沢川、カンカン川、ペナコリ川、ペナコレ川などの小さい支流も流れ込んでいる。したがって、ダム湖には、日高町の至るところから大小様々な川が合流して流れ込み、その川の流れとともに雨水や川が削り取った土砂も運び込まれているのである。

それらの川がダム湖に流れ込むまでには、途中田んぼや畑等の耕作地があったり、山林を伐採して造られた家畜の放牧地があったり、木材を生産するために皆伐されたところや、ブルドーザーで地面がかき乱されたり埋め立てられたりした所は雨水に浸食されやすくなり、しかも豪雨の時には、崖崩れや地滑りや鉄砲水等も誘発されることが多いのである。そのような土地状況のもとを、源流から流域の5分の4に当る流路84Kmを流れ下った河口近くにダムがあるのであるから、本流や各支流から運ばれてきた膨大な土砂がじわじわとダム湖に沈殿し湖底を埋めていったらうことは想像するに難くない。

斯してダム湖は、僅か10年足らずの間に、水位調節期間には広い沖積地が陸化する程の膨大な土砂を堆積させていったのである。これからも湖底への土砂の堆積と湖

床の上昇は休むことなく進行していこうし、それとともにダム貯水能力はますます低下し、沖積地も一層広がっていくものと思われる。

このダム湖の中の陸化する沖積地は、1年のほとんどは水没して7～9月のほんの3ヶ月間しか現れないのであるが、その短い間でも水面から顔を出した砂泥地にはびっしりと草や低木が生い茂るのである。一体どのような植物が生育しているのだろうか。とても興味をそそられたので、沖積地と回りの湖岸の植物について調べてみることにした。調査範囲はダムの堰堤からダム湖の上流域にかかる管理橋までの湖を呈している部分で、陸化している各月に1～2回調べたものである。

調べるまでは、このような環境のもとで育つ植物は、湿地に出るイグサやスゲやトクサの仲間、それにイネ科の植物位でそれも限られたものだけだろうと思っていたのであるが、思いの外多くの植物が生育していてその生命力というか厳しい自然にも適応して生き延びていく逞しさに驚いた次第である。タチヤナギやオノエヤナギは2～3mにも成長していて、それが9ヶ月間も完全に水没するのであるが、水中で腐ったり溺死することなくじっと耐えて、毎年何もなかったかのように枝葉をびっしりと茂らせているのである。草本類のように、陸化した時に種子や宿根で毎年新しい茎を伸ばすのとはわけが違うように思うのである。草本類でも湿地性でない植物達にとっては、9ヶ月もの間湖底に沈められている環境は、種や根であろうと決して居心地のよいものではないであろう。植物は私が思っていたより遥かに逞しく強いのである。

今回の調査で、在来種のツルアブラガヤとマルホハリイは日高初産、掃化植物ではセイヨウオオバコとアメリカアゼナ、カタガワヤガミスゲも新しく確認したものである。このように管内でも初産となる植物に数多く遭遇できるとは思っていなかったことであった。しかし、ダム湖の沖積地の土砂は、日高の各地から運ばれてきているのであるから、いろいろな植物が出てきてもおかしくないのかもしれない。

2. ダム湖沖積地の植物

沖積地は、ダム湖の中流域から上流域の両岸から湖の中央部に向かって広がっている。沖積地の植物は場所により優占種は変わってくるが、各群落を構成している植物相は、全域にわたり殆ど同じである。

< 中流域の右岸 >

中流域の右岸はサンカクイが一際目立ち大きな群落を作っている。水際近くでは、サンカクイーミズドクサ群落が目立ち、オオヌマハリイ、マルホハリイ、マツバイ、コホタルイ、タチコウガイゼキショウ、ケイヌビエなどが混生している。湖岸に向かってサンカクイーエゾノサヤヌカグサ群落が続き、湖岸近くではサンカクイーイガオナモミ群落が形成されている。ツルアブラガヤやエゾミソハギ、チョウジタデ、ヒロハノコウガイゼキショウ、イヌスギナ、サジオモダカ、ヤナギタデ、サナエタデ、アメリカアゼナなども見られる。ツルアブラガヤは、湖に流れ込むルオマナイ川の川

口辺りにしか出ないので、元はルオマイ川の流域のどこかに自生していて、その種が流されてきたものと思われる。

< 上流域の両岸や中洲 >

上流域の両岸は、中流域と比べてやや乾いた状態の所が多くクサヨシが多くなる。岸近くではクサヨシーイグサ群落やクサヨシーツルヨシ群落が見られ、水際にはタチヤナギーサンカクイ群落やタチヤナギーミズドクサ群落が作られている。岸近くではトクサやヒメドクサ、ハイミチヤナギ、ヒメコウガイゼキショウ、セイヨウオオバコ等が多く、木本類ではタチヤナギの他にイヌコリヤナギやエゾノキヌヤナギ、カワヤナギなども散見される。

中洲には、クサヨシーイヌスギナ群落が形成され、ここでもコホタルイやマルホハリイ、タチコウカイゼキショウ、サジオモダカ、ミズアオイ、クロヌマハリイ等が混生しガマも見られる。フトイは中洲だけに見られるが、背丈は2m以上にもなり大型である。タチコウガイゼキショウも大きな株を作り70cmにも成長する。沖積地は山や畑などから削られ運ばれてきた表土からできているので肥沃なのであろう。

その他外来種のシロバナシナガワハギやオオカナダオトギリ、セイヨウオオバコ、ノランジンなども見られる。

< 右岸の土手（傾斜面） >

ダム湖右岸は、管理用道路になっている。ダム湖側の傾斜面には、護岸のために大きな砕礫が敷き詰められ、その縁にはタチヤナギが植えられている。傾斜面の前面にはタチヤナギーイガオナモミ群落が作られていて、ここでもサンカクイは多く見られその他ムシトリナデシコやヒメスイバ、スギナ、コウゾリナ、オオヨモギ、イヌタデ、アレチマツヨイグサなども見られる。

以上は中流域、上流域、管理用道路沿いの大まかな群落であるが、各群落の植物相は、概ね共通していて次の通りである。

《 草本類 》

- とくさ科 トクサ、ヒメドクサ（絶滅危惧種）、ミズドクサ、スギナ、イヌスギナ
- いぐさ科 イグサ、タチコウガイゼキショウ、ヒメコウガイゼキショウ、ヒロハノコウガイゼキショウ
- かやつりぐさ科 アブラガヤ、ツルアブラガヤ、ヒゴクサ、エナシヒゴクサ、オオカワズスゲ、ジョウロウスゲ（絶滅危惧種）、ウシクグ、ヒメクグ、タマガヤツリカタガワヤガミスゲ、ヒカゲシラスゲ、サンカクイ、コホタルイ、マルホハリイ、マツバイ、フトイ
- おもだか科 身モダカ、ヘラオモダカ、サジオモダカ
- がま科 ガマ
- みずあおい科 ミズアオイ（絶滅危惧種）
- みくり科 ミクリ（絶滅危惧種）
- いね科 イヌビエ、ケイヌビエ、タイヌビエ、ウキガヤ、エゾノサヤヌカグサ、ヌマイチゴツナギ、コブナグサ、アキメヒシバ、アキエノコロ、キンエノコロ、ムラ

- サキエノコロ、クサヨシ、ヨシ、ツルヨシ、ミノゴメ（カズノコグサ）、ノゲシバ
 ムギ、シバムギ、オオスズメノカタビラ、オオアワガエリ、オオニワホコリ、ニワ
 ホコリ、カモガヤ、コヌカグサ、コイチゴツナギ、ナガハグサ、ヌカキビ、ハمام
 ギ ○ふうろそう科 ゲンノショウコ、ミツバフウロ
- きく科 アメリカセンダングサ、アキタブキ、イガオナモミ、エゾタウコギ、タウ
 コギ、エゾノキツネアザミ、エゾゴマナ、エゾノコンギク、エゾノユキヨモギ、オ
 オヨモギ、オグルマ、オオアワダチソウ、セイタカアワダチソウ、オトコヨモギ、
 コウゾリナ、セイヨウタンポポ、ネバリノギク、ハンゴンソウ、ヒトツバハンゴン
 ソウ（ミミキオン）、ヒメジョオン、ヒメヨモギ、ヒメムカシヨモギ、ヒヨドリバ
 ナ、ヘラバヒメジョオン、ミヤマヤブタバコ、ヤマニガナ、ヤクシソウ
- しそ科 イヌトウバナ、イヌゴマ、エゾシロネ、コシロネ、シロネ、カワミドリ、
 クルマバナ、ナギナタコウジュ、ハッカ、ヒメジソ、ヤマハッカ
- たで科 イヌタデ、オオイヌタデ、サナエタデ、オオネバリタデ、ヤナギタデ、ウ
 ラジロアカザ、イシミカワ、アキノウナギツカミ、ミゾソバ、タニソバ、エゾノギ
 シギシ、ナガバギシギシ、ハイミチヤナギ、ヒメスイバ、オオイタドリ、ミズヒキ
- みそはぎ科 エゾミソハギ ○つゆくさ科 ツユクサ ○なす科 イヌホオズキ
- あかばな科 アカバナ、イワアカバナ、チョウジタデ、アレチマツヨイグサ
- ごまのはぐさ科 アゼナ、アメリカアゼナ、ピロードモウズイカ
- まめ科 アカツメクサ、シロツメクサ、カラメドハギ、クサフジ、コメツブウマゴ
 ヤシ、シロバナシナガワハギ、シャグマハギ、ツルマメ、ヒロハクサフジ、ミヤコ
 グサ、ヤブハギ、ヤブマメ、○ひるがお科 ヒルガオ
- けし科 クサノオウ ○らん科 ネジバナ ○ぼら科 ナガボノシロワレモコウ
- あぶらな科 キレハノイヌガラシ、スカシタゴボウ
- なでしこ科 ケフシグロ、フシグロ、ノハラナデシコ、ヒロハノマンテマ（マツヨ
 イセンノウ）、ムシトリナデシコ ○かたばみ科 エゾノタチカタバミ
- せり科 アマニュウ、オオバセンキュウ、セリ、ノラニンジン、ヤブジラミ
- おみなえし科 オミナエシ、オトコエシ ○くわ科 カラハナソウ
- きんぼうげ科 タガラシ、ヤマキツネノボタン ○ががいも科 ガガイモ
- おとぎりそう科 オオカナダオトギリ、コケオトギリ ○ゆり科 キジカクシ
- あかね科 オオバノヤエムグラ、チョウセンカワラマツバ
- いらくさ科 アオミズ ○おおばこ科 オオバコ、セイヨウオオバコ
- さくらそう科 クサレダマ、コバンコナスビ

《 木本類 》

- やなぎ科 イヌコリヤナギ、エゾノキヌヤナギ、オノエヤナギ、カワヤナギ、タチ
 ヤナギ、ネコヤナギ ○ぼら科 ナワシロイチゴ
- かぼのき科 テヤマハンノキ ○まめ科 ヤマハギ、イタチハギ
- 右岸の管理道路、左岸の斜面には、この他にも多くの樹木が見られるが、上記の
 のはダム湖の中の砂泥地に生えているものである。 (2009.11.07)

テーマ 自然について

外来種を通してみた野幌森林公園の自然、北海道の自然について

1 外来種とは

- ・ 他地域から（国内も含めて）人為的に持ち込まれた生物。特に、野生化して世代交代を繰り返すようになり生態系に定着した動植物。
 - ・ もともとその地域にいなかったが人間の活動によって他の地域から入ってきた生物。
 - ・ 移入種、外来種、帰化種など過去にはいろいろな呼び方があった。移入種は環境省、外来種は国交省。
 - ・ 外来種が引き起こす問題
 - 在来種への圧迫
 - 遺伝子の攪乱
 - 農林水産業被害
 - 生態系への影響（食物連鎖）
 - ・ 外来生物法が 2005 年 6 月に制定される。法では国外から入ってきたもの、明治時代以降に導入されたものを中心に対応している。
 - ・ 特定外来生物 飼育、栽培、保管、運搬
輸入
野外に放つ、植える、撒く
人に譲渡
- これらすべてを禁止。罰則規定あり。

2 野幌森林公園の自然

アライグマ（ペットの逃亡）特定外来生物

- ・ 木のうろを住処にする。フクロウを営巣木から追い出す。1997 年に野幌のアオサギがコロニーを放棄。鳥の雛や卵を食べる。アライグマを見かけるとキツネやタヌキの姿が消える。田んぼのカエルの声が消える。
- ・ 日本への侵入は 1962 年。1979 年に恵庭市周辺で 10 頭ほどのペットのアライグマがまとまって逃げた。あらいぐまラスカルブームで、数万頭が輸入された。
- ・ 恵庭の農業被害。95 年に 12 万円、96 年に 500 万円、97 年から駆除（108 頭）しかし 900 万円、98 年 138 頭駆除、被害額変化なし、99 年 500 万円を切る。
- ・ 野幌森林公園では、1500 ヘクタールに 20～30 頭と推定。

セイヨウオオマルハナバチ（温室栽培植物の受粉用にオランダから輸入）特定外来生物

- ・ 食性は吸蜜、盗蜜癖が強い。
- ・ 飼育下で、在来種の女王を刺殺し、巣を乗っ取る例が確認されている。
- ・ 在来種との交雑、交雑による在来種の不妊化、寄生生物の持込、在来植物の繁殖阻害。
- ・ 1992 年から本格的に日本に導入、1 年で 7 万コロニー使用。
- ・ 在来種（クロマルハナバチ）の商品化も進んでいるが、生産工場はヨーロッパ、遺伝子攪乱の問題あり。北海道には、クロマルハナバチはいない。

オオハンゴンソウ（観賞用として導入）特定外来生物

- ・ 1955年に確認
- ・ 野幌でも近年急激に増えてきている。
- ・ ポラレンでは、2年続けて野幌での抜き取り作業を行った。来年もやる予定。

ハリエンジュ（庭木、街路樹、蜜源植物、薪炭材として導入）要注意外来生物

- ・ 1873年に導入。野幌では、大正時代に植栽した記録がある。
- ・ 平成16年台風18号被害で明るくなった場所に生えてきた。（札幌で最大瞬間風速50.2mを記録）
- ・ 侵略的外来種とも言われ、在来種による自然林の再生が阻害される。
- ・ 幼木の抜き取りをしたが、周辺に母樹があり、毎年種が供給される。
- ・ 母樹768本のうち21本を試験的に伐採。
- ・ 伐採だけではだめ。伐根、切り口への除草剤の塗布が必要。

3 北海道の自然

ブラントラウト（外来魚密放流）要注意外来生物

- ・ 支笏湖にいる。厚田川（周年全面禁漁）で定着のうわさもある。
- ・ 北米からのニジマスの卵に混入して進入。
- ・ 北海道、秋田、栃木、神奈川、山梨、長野に移入分布。
- ・ ブラックバスの密放流が北海道で少ないのは、ブラントラウトがいるためとまで言われている。
- ・ 1980年に確認、2001年までに40水系まで拡がった。降海したものが別の川に遡上することが確認されている。
- ・ 魚類一般を捕食。

カブトムシ（養殖場からの逃げ出し、夜店の売れ残りの廃棄）

- ・ 1968年北見の夜店で販売。1968～1972年に養殖場を作り、後に閉鎖。数年後に周辺で大発生し、農業被害をもたらした。
- ・ 大発生時以外ははっきりとした農業被害の報告がない。
- ・ 農家では堆肥にカブトムシの幼虫がいると、孫が喜ぶと、逆に歓迎している。
- ・ いずれにしても過去には北海道にはいなかった。

ミンク（毛皮用として北海道に移入）特定外来生物

- ・ 1928年（昭和3年）4頭輸入
- ・ 北海道、長野県千曲川流域、福島県阿武隈川流域
- ・ 在来イタチ科との競合の可能性、養魚、養鶏への被害

キタキツネとギンギツネの交雑（道東）

- ・ 1917年ごろに輸入
- ・ 道内に20ほどの飼育業者がいた。
- ・ 80年代、過剰生産による価格暴落で廃業が相次ぐ。

函館五稜郭のお堀のブルーギル（不明）特定外来生物



生態系に悪影響を及ぼす「特定外来生物」のマンガースが、本土で初めて鹿児島市喜入地区に繁殖しているのが判明し、22日で8カ月が過ぎた。繁殖力が旺盛なのに同地区以外では捕獲されず、本土侵入の経緯も不明。一方で本土の環境に適応し、「進化」した形跡が確認された。専門家は「今のうちに根絶しないと、生息域が九州全域に広がってしまう」と警告する。

■寒さが阻む？

「現段階で喜入は北限なのかも」。今月上旬、鹿児島県が開いた行政担当者と専門家の検討会で、環境省那覇自然環境事務所野生生物課の阿部慎太郎課長補佐は指摘した。

原産は南アジア。猛毒を持ったハブの「天敵」とされ、ハブの駆除を目的に1910年に沖縄本島、70年代末に奄美大島に持ち込まれた。県は昨年6月、喜入地区での生息を確認。その後、79年に捕獲したはく製があることも分かり、少なくとも30年前から本土で繁殖していたとみている。

鹿児島県は昨年7月に捕獲を開始。これまで約70匹がわなにかかった。捕らえたのはすべて同地区の中名（なかみょう）を中心とした南北12キロのエリア。また、目撃証言もほとんどが同地区だ。

沖縄と奄美では、生息域が年に1キロ四方ずつ広がったとみられている。阿部補佐は「本土は寒さが拡大を阻んでいる可能性がある」と分析した。

■施設でショー

そもそもどうやって本土に上陸したのか。喜入地区には世界最大級の石油備蓄基地があり、一時はタンカーに紛れ込んだ説も挙げられた。しかし、鹿児島国際大の松越公威教授（哺乳（ほにゅう）類学）は「警戒心が強いのに、自ら船に乗るとは思えない。人が持ち込んだと考える方が自然」とみる。

同地区に隣接する指宿市の池田湖畔には、69年ごろから99年まで、ハブとの決闘ショーを見せる観光施設があった。「『数回逃げた』と75年ごろ、ショーを運営する男性に聞いた」。近くのドライブインの支配人（57）は証言する。ところが男性はすでに死亡、事実確認は困難だ。

県自然保護課も「侵入の経緯に関する複数のうわさを調査したが、どれも古い話で真偽は分からなかった」としている。

■「壁」の突破も

検討会では松越教授が、本土の個体は沖縄に比べ、寒さに耐えるよう体重が大きく、体長は小さく「進化」しているとの研究結果を報告した。

食欲旺盛で天敵は皆無。喜入地区でまだ目立った被害はないが、沖縄と奄美では作物を食い荒らし、固有種のヤンバルクイナやアマミノクロウサギを絶滅の危機に追いやった。沖縄で1万匹、奄美で3万1千匹が捕獲されたが、根絶のめどは立っていない。

「地球温暖化も重なり、やがては『北限の壁』を突破する」。松越教授は危機感を訴えている。

=2010/02/23 付 西日本新聞朝刊=

- ・ 当時の皇太子殿下が訪米の際の手みやげとして持ち帰ったものを水産庁が各地の試験場などに分与し、各地で放流された。
- ・ 1991年確認、2004年から駆除（釣り、電気ショック）
- ・ 2001年大沼周辺の沼でコクチバス、2002年南幌親水公園、余市ダムでブラックバス
- ・ 大沼と余市は駆除に成功、南幌も順調に駆除が進んでいる。

4 日本の自然

アライグマ

ブラックバス（外来魚密放流）特定外来生物

- ・ 1925年に芦ノ湖に釣りの対象、食用として導入。当時から拡散の心配があり、閉鎖系の芦ノ湖だけに導入された。
- ・ 全国に分布、琵琶湖のブラックバスが大問題となっている。
- ・ 平成17年2月に環境省が琵琶湖のブラックバスをについて、特定外来生物指定の可否についてパブリックコメントを実施したときに、釣り愛好家の団体から、すさまじい数の意見提出がされた。オクチバスの指定反対が9万5620件、賛成が1万2195件。
- ・ 釣りブログでの記述 たえば今回のパブリックコメントの内容はどう書けばいいのか解りやすい例文を一斉に配信したり各地のフィールドで発生した一刻を争う緊急事態を一斉に知らせたり、パブリックコメントの数がまとまらない時は応援要請したり、県条例情報や他府県のパブリックコメント募集などに関する情報を手遅れにならない様クイックに、一気に全員へ情報配信できるサイトです。このサイトはSTK（滋賀釣り協）メール会員の拡大・拡充を狙い、バスファンの皆様の力を一本化することを具体的に形にした場所なのです。予定では参加を表明してくれている多くのプロ達からのメッセージ、シークレットバス釣り最新情報なども更新予定。メーカーや組織の垣根を一切取り払って公開できる真の「バスフィッシングファンの情報ステーション」にご協力を！！

ジャワマンゲース（意図的導入）特定外来生物

- ・ 奄美大島に1979年に30頭導入
- ・ 現在5,000から1万頭と推測。環境省では全頭駆除を目指している。
- ・ マンゲースは昼、ハブは夜。
- ・ 九州に上陸の報道あり。

まとめ

外来種ではないが、日高地方様似のエゾシカの被害、ササすら食い尽くされている。エゾシカの嫌いなものハンゴンソウ、オオサクラソウ。見た目は手入れの行き届いた里山

ふるさと ウサギ追いしかの山、小鮒つりしかの川 → アライグマおいし、ブラックバスつりし

「自然は子孫からの預かりもの」アメリカインディアンの人々の考え方

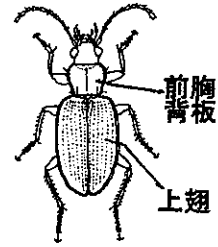
(Protecting Mother Earth For Future Generation)

「私達は未来の世代からこの自然を預かっている。」

ゴミムシのこと

苫小牧市 谷口勇五郎

今年はヨコスト湿原（白老町）の生物（植物・野鳥・虫）調査をしました。私は勉強のため虫も担当させてもらいました。白老東高裏の雑木林に地上歩行性の虫を採集するため、ベイトトラップ（紙コップの口が地面と同じ高さになるように埋めたトラップ）を4～5回設置しました。誘引源として食酢を数滴入れました。オサムシやセンチコガネ・シデムシが入っていました。ゴミムシ類も少し入っていましたが、解りやすいものを除いて放しました。



ゴミムシ類
（約1～10倍）

オサムシ科は日本に約1,000種、オサムシ類と大部分のゴミムシ類に分かれます。ゴミムシといえば、オサムシを小型にした形で殆ど黒っぽく、どれもよく似ており、種類が多く、私には手に負えないと思っていました。

ところが、9月も過ぎ、湿原には虫も減ってきました。以前、砂浜の流木の下からハサミムシやホソクビキマワリ（甲虫）がいたのを思い出し、軒並み流木を持ち上げ探すと、ゴミムシがいました。少し大きいもの、小さいものと、思い切って挑戦することにしました。保育社の甲虫図鑑（Ⅱ）にはゴミムシ類の図版は22あります。同じような体つき、色合い、大きさ、分布など、約20亜科に分けられ、亜科などや種の解説もあります。

大きさと北海道の分布からピックアップし微妙な体つきの違い、解説文を読み返しました。前胸背板の形（丸い・角ばる・狭い）がどうの、上翅の様子がどうの、大顎の刺毛の有無、などと、標本と図版を見比べました。最初にクロオオナガゴミムシ（16mm）ではないのかなと思うものにたどり着きました。5日後、浜辺で流木をめくると、1cm ぐらいのゴミムシと、小さなアリのような虫が少し動きました。帰宅してよく見ると5mmもないのに、立派なゴミムシでした。こんな小さいものがあるとは。更に図鑑を見ると、5mmぐらいは普通で、3mmや2mm台のもの、1.5mm内外というものさえ載っています（チビミズギワゴミムシ）。ちなみに、ヨコストの砂浜にいたのは、メダカチビカワゴミムシ（4.5mm）、カギモンミズギワゴミムシ（4.5mm）ではないかと思います。ゴミムシ（ひどい名前ですね）とはゴミの中の虫という意味なようですが、ゴミの中だけでなく、河原、田畑、石の下に住み、大部分は地表を歩き、肉食といえます。

ゴミムシはどれも同じようなので、雄は同じぐらいの大きさのものをを見ると、雄だろろうが別種であろうが交尾しようとするものの、交尾器の形が種類ごとで異なるため、違う種類では交尾できないそうです。

《北の芸術家シリーズ》② 坂本直 行 さん

十勝の原野から日高の山脈を描きつづけて

広報部

山や花の好きな人たちは、坂本直行さんの絵画に親しみを感じている人が多いと思う。私自身もその一人である。3年前になるが、北大博物館で坂本さんのペン画のネパール展を見た。鋭い岩峰のダウラギリを背景に、民家の周囲で草を食べるヤクの絵が印象的であった。彼は著書で、高い山奥に、ほそぼそながら人間が住み生活している様子はヒマラヤの山々と見事に調和して美しい、十勝の原野と共通するものがある、と記している。

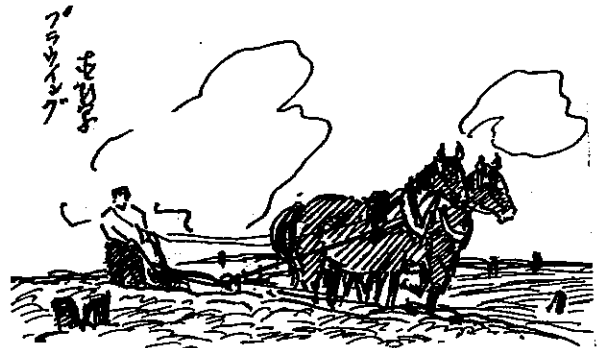
その秋、彼の絵を見たくなり中札内の「直行デッサン館」に行ってみた。柏の原生林に囲まれた広大な敷地の中に、記念館などとともにあった。紅葉した柏の木々には華やかさはないが、この原野にふさわしく見えた。でも、この柏の木々であるが、開墾時は根が張っていて耕地にするにはとても苦勞が多かった。「デッサン館」はこの街の中心地に移転していたので、早速その場に行き、初雪に覆われた燦然と輝く日高の山々と赤く染まった十勝の原野とが見事に調和した美しいスケールの大きな作品を鑑賞することできた。

《原野での農牧業を通して——自然の非情さと暖かさを体験して》

十勝の広尾町の原野に入植して牧畜、畑作の仕事をはじめ。そこでの土地は痩せ、霧に覆われ、早霜に襲われたりして収穫はあがらず惨澹たるものであった。冬には牛馬の飼料も不足することもあった。彼が書いているように、自然は一面では「全く妥協を許さない非情」そのものでもあった。だが、他方では、原野から見える日高の山々、特に初秋、朝日に染まるこの連山の美しさは格別であり「僕の胸は躍った」。更に、巡りくる春は、草木は萌え繁り、牛馬などに新緑の草を食べさせることもでき、種を播くときには、この「土の柔らかいぬくもりが体を包むのである」と記している。

そこに「無限の暖かさ」を感じていた。こうして、彼は厳しい労働を通して、非情な自然を体験しながらも、そこに暖かさを感じ取っていた。

その当時の彼の絵は、現実の様々な生活の様子を描いている。ここに載せた「プラウイング」をはじめ、雪原に馬を走らせる「冬の牛乳運搬」、馬車で大量の枯れ草を運ぶ「荷馬車」、そして「雪原をゆく馬糞」などをあげることがで



きる。これらの作品は写実主義であると言ってよい。ここには後期の山岳画家へなっ

ていく原点があると思う。

《 鋤を絵筆にかえ——本格的な画業に 》

札幌に転居して、原野での35年間の生活に別れ、本格的な画業に専念する。大雪山、知床などの山々を歩きながら、更にはヒマラヤへのスケッチ旅行をして膨大な作品を描き残した。それぞれの作品には味わい深いものがある。だが、なんと言っても十勝の原野から日高山脈を描いた作品が最も優れたものであると思う。代表作として「晩秋の原野と日高三峰」「晩秋の原野と日高山脈の朝焼け」「初冬の日高連峰」などをあげることができる。それらは、晩秋から初雪にかけて、原野の柏の木々は紅葉し、山々を覆う雪の輝きとあいまって、季節の変わり目に見せる動的なものの中に、瞬時の静けさのようなものを感じさせてくれる。

若い時は、原野での労働、生活を描いたリアリズムがあったが、壮年の円熟期にはそれらを内包し、超越したようなロマンチズムがあるように思う。前期は農民画家であり、後期は山岳画家であるということもできる。

本格的な山岳画家である坂本直行さんに関して拙い文を書いてきた。実は、今から30年以上前になるが、旭川に住んでいたとき、ある喫茶店の2階のギャラリーで展示会を開く際、搬入を手伝った。展示を終えた段階で話を聞く機会があった。その内容から、とって実直で謙虚な人と思った。なかでも印象の残ることが二つあった。その一つは、山の高さはうまく描けなくて、10年間位、描いては捨て、捨てては描いていた。他のもう一つは、文章は下手なので書くのは嫌いである。

だが、原野での生活を書くことはとって難しいと思われるが、絵と同じように文体には躍動感がありリズムがあつてとともうまい。

最後に彼の著『山・原野・牧場』から原野の美しい描写を引用してみる。「裏の山からの風景は美しい。その風景を少し書いてみよう。日当たりのいい南面の、馬どものつけた道——ゆるやかに彼らの気ままにつけた道を登っていくと、平原と海と山とそれに大きな空とのまことにひろやかな風景を見ることができる。春浅い平原は、まだ黄褐色ではあるが、陽炎が燃えて暖まった空気は、冬の間、寒さにちぢこまっていた毛穴を抜けさせる。万象は動き始めている。それは春の力である。僕の体は弾力に満ちる。——足下に広げられた広大な平原、そこに無意味に近いと思われるほどの僅かに残されたカシワの風防林が、直線的に平原を幾つかに区切っている。そしてその間に農家が驚くほど稀薄に点在している。」(S)



・なお挿入の絵などは彼の著書「開墾の記」などから

本の紹介 鷲谷いづみ著『<生物多様性>入門』(岩波ブックレット)

生物多様性が持っているかけがえのない意義を確認し
里山、里地の保全、再生をめざした取り組みを

広報部

昨年高校入試国語の問題に、東大の生物学者鷲谷いづみさんの著書「自然再生」(中公新書)の一部が出題された。今日のように生物の多様性が形成されてきた様子がわかりやすく美しい文体で書かれていた。早速、彼女の著書を読んで見た。全国各地を調査しながら、生物多様性の視点から里地、里山などの複合生態系がとっても重用な役割をはたしていること、この日本の伝統的な生態系を保全していくが緊急の課題であることを早くから論じていた。

市民の多くの方々に読んでもらいたいと考えて、自然ふれあい交流館と共催行事の際に発行している「NOW」第3号に、入試に載った小論文を掲載した。

昨年10月には名古屋で「生物多様性条約」COP10が開催されるので、それに関する著書を読みたいと思っていた。その会議に合わせるようにして彼女の『生物多様性入門』が出版された。遅くなったが紹介してみたい。

そうはいつでも正確な紹介には、私自身の力量不足もあって、うまくできない部分もあるので、最近の新聞の環境に関する報道などを交えながら記してみる。

< 生物多様性——三つの多様性 >

今日、生物多様性というとき、「種の多様性」「種内の多様性」「生態系の多様性」の三つを含めて言われている。第一の「種の多様性」とは、生物種類の多様性で、今日地球上では約174万種が発見されている。未発見の種を含めると約1千万〜3千万と推測されている。第二の「種内の多様性」とは、同じ種に属している個体でも大きさ、形、色などさまざまな違いがあることである。第三に「生態系の多様性」とは、地球上のそれぞれの地域には、その土地や気候などの違いによって固有な生態系がつくられている。

自然の世界では、生き物たちは餌などを求めて<食べる、食べられる>という対立関係にあるが、他面では、樹木と鳥、花とハチのように助けあって生きている共生関係にある。ある時はせめぎあい、ある時は相補的關係にあると言える。生物学ではニッチ(Niche)と呼ばれ、くぼみ、ふさわしい場所などを意味し、ある種が生態系のなかで分担しながらその持ち場を生かしながら生きていると言うことである。

生物の多様性があるところでは、生態系の機能を高め、その安定化をもたらしている。分子生物学者の福岡伸一さんの表現をかりると「動的平衡」ということであろう。

＜ 生物多様性の恩恵——4つの生態系サービス ＞

「生態系サービス」なる用語は、私たちにはあまりなじみのない、生物学者特有の表現と思うが、生態系が人間に与えている便益、恩恵のことである。そこでは、供給的サービス、調節的サービス、文化的サービス、そして基盤的サービスの4つをあげている。4番目の基盤的サービスであるが、様々なサービスを生み出す土台になっているもので生物間の関係そのものを意味している。その他のサービスは内容的には明解なので下の図を参照してほしい。

＜ 生物の大絶滅 ＞

1960～1975年には約千種であったが、それ以降増え続け、今日では約4万種が一年間に絶滅していると言われている。IUCN（国際自然保護連合）は、生き物4万7千種を調査したところ、2009年時点で1万7300種が絶滅の恐れがあるとレポートしているそうである。

絶滅の原因は主に次のようなことがあげられている。

①開発や動植物の乱獲、生息地の減少②里山、里地の手入れ不足③外来種による在来種の減少④地球温暖化によって生息地が脅かされている、などである。①と④とが中心的な要因であると思う。

この著作ではあまりふれられていないが、「朝日新聞」の環境に関連した記事によると、鷲谷いづみさんは人間の活動によって生物の絶滅がこんなに加速された時代は、第6回目の三波にあたると唱えている。

第一波は、人間の狩猟能力が高まったところで大型の哺乳類が絶滅し、第2波は人間が太平洋の島々にも生活の場を求めて移住したので鳥の絶滅が進んだ時期である。そして第3波である現代は人口爆発や産業の急速な発達によって様々な生物が多大な打撃を受けている。

中生代のジュラ紀、白亜紀にいた恐竜は、小惑星が衝突をくりかえし硫酸塩や



図3-1 心身ともに豊かなくらしをささえる生態系サービスの概念図。

ガスなどを大量に放出したため、太陽光は遮られ、その結果、急速な寒冷化によって絶滅したと言われている。恐竜の時代には小さな存在であった哺乳類は、その後大きな発展をとげ哺乳類の時代となり今日にいたっている。その頂点に立つ“現代の恐竜”たる人間は、かつて生存していた恐竜が地球の大変動によって絶滅したのとは違って生態系を無視した自分たちの利己的な活動によって人間を含めた生物の絶滅をもたらしていることは間違いない。

＜ 生物多様性を保全し維持していくために ＞

生物多様性を保全していくためには、今回名古屋で開催された国際会議で採択された「愛知ターゲット」を推進していくことは当然である。それを柱にしながらもいくつかの国際的条約、取り決めを実施していくことも重要である。

この著作では、筆者がそうした条約を含めていくつか提案されている中から、私が注目すべきものと思ったものを紹介してみたい。

①生態系ホットスポットを守ること

ホットスポットとは、地球上で生物多様性の高い地域であり、同時に絶滅が危惧される特殊な地域のことである。世界で34カ所が指定され、そのうち16カ所が熱帯雨林地帯である。先進国では珍しく日本もその一つに指定されている。当然のことであるが、日本を含めてその貴重な地域の保全、再生が急がれている。

②湿地の保全とラムサール条約——その保全、再生をめざしていくために

今日、湿地の開発、劣化が急ピッチで進んでいる。湿地の開発にはじまり、河川の改造、ダムによる分断、それに伴って水質悪化などがあげられる。自然の弱い部分といわれる淡水の生態系の中に危機が集中し、水草、水生昆虫、両生類、水鳥などが生息の場を失ってきている。

日本では、わが北の大地、釧路湿原、サロベツ湿原を含めて37カ所が登録されている。釧路湿原などでは十分ではないが様々な再生への取り組みが進められてきた。

③持続可能な一次産業と里山——里山、里地からの発信をめざして

日本の里山、里地が生物多様性、持続可能な土地の利用の仕方からも注目されている。農民たちが自分たちの生活資料を得るために土地を切り開いて田畑をつくり、その周囲には草原、水路、ため池、人工林などをつくってきた。それが里山、里地であるが、その複合的な生態系が今日高く評価されている。そこには様々な生態系が混在していて、多くの生き物が生息している。絶滅が心配されている約半数がここに生息している、と報道されている。

日本ばかりでなく世界の多くの地域にあるこうしたヒトと生き物との伝統的な共生システムを生かしていくことがとても重要な課題であることが再認識されてきた。日本は“SATOYAMA イニシアチブ”として世界に発信して

いこうとしている。そうした保全、再生を私たちが担っていききたいものである。今後の取り組みがとて注目される。

私たちは、自然に働きかけ食料を生産し、住居を建て、家族とともに生活してきた。そのことは一面では、これまであった原生の自然を破壊してきたが、他面では里山、里地のような多くの生き物が生息する場を提供してきたとも言える。今日、このことを捉えかしてみることがとて大切である、と考える。自然を壊し利用しながらも自然の再生、共生システムをつくってきたことを。(S)

<補章>

《 昨年10月名古屋で開催された国際会議での合意 》

* 「愛知ターゲット」

- ・すべての自然生息地の損失速度を少なくとも半減させる。
- ・陸地で17%、海域で10%を保全する。
- ・農、林業地域を、生物多様性を保存しながら管理する。
- ・気候変動など脆弱な生態系への人為的圧力を最小限にする。
- ・政府や企業などが持続可能な計画を実施する。

など、20項目で合意。

* 「名古屋議定書」

医薬品のもとになる動植物などの遺伝資源の利用についての国際ルールを確立。資源を医療として開発し利用する先進国は、それがもたらす利益を原産国と分け合う、という国際ルールを取り決めた。

《 とてうれしいニュース 》

* 新たに4名の方々が加入—— ボラ・レン加入のお誘い結果 *

新しく加入された4名の方々の氏名は以下の通りです。

島山 克則さん (千歳市) 渡邊 智子さん (札幌市)

清水 利章さん (札幌市) 川田 貞さん (札幌市)

今後、加入された皆さんと力を合わせて活動していきたい。

自然観察 NOW

野幌森林公園自然情報

平成22年度 NO5

平成22年8月5日発行

北海道ボランティア・レンジャー協議会

清楚な花を咲かす ノリウツギ(サビタ)

樹木たちは春に花を咲かせ、真夏にはいっぱい太陽の光を受け光合成を行って、秋に向けて種子を育てるのに忙しいようです。先日、7月29日(木)、今回の観察会のための下見をしてきました。その際、とても清楚な感じがする「ノリウツギ」が目につきました。そこで今回はこの樹木がつける花などについて解説をしてみます。

ノリウツギは日当たりの良い山地などに自生し、高さは約3-5m位になる落葉低木で、その名の由来は和紙をすく糊(のり)をつくるために用いられたので、「糊空木」と呼んでいます。北海道では「サビタ」と呼び、親しまれてきました。

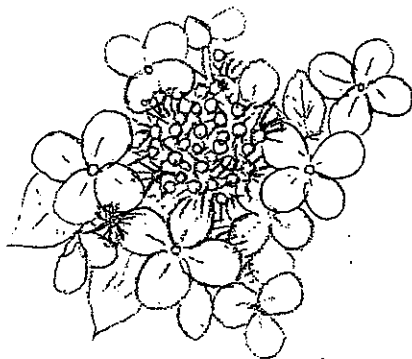
皆さんも知っているでしょうが、全体が円錐形をした小さな花の集合体で、外側に約20個の飾り花(中性花)をつけ、その飾り花がとても清楚な感じがします。虫たちはそれにつられてやって来るのでしょうか。

飾り花の内側にある小さな花(両性花)は、よく見ると、雄しべがたくさんつき出て、小さな白い花弁が5枚、がくもあります。雌しべの先端は3つに分かれ、その根元には密のような液体があります。花全体から蜜の香りがします。

円錐形の全体が一斉ではなく、先端の方が後から咲き、やがて花糸は落ち、雌しべはふくらみ緑色になります。

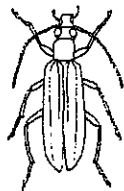
飾り花はだんだん色があせ、上向きのものが下向きになり褐色になります。

かつてアイヌの女性たちはこのノリウツギから髪の毛の洗剤をつくりました。外皮とぬるぬるした内皮を布に包んで水に浸すと白い泡が出るそうです。その白い泡を用いると髪の毛の汚れがよく落ちたといわれています。



〇〇 ノリウツギの花に集まる虫たち 〇〇

花が咲き蜜の香りのする頃、いろいろな虫が訪れます。調べてみると、ケブカスズメバチ、ヒメコガネ、アオハナムグリ、メンガタカスミカメ(カメムシ目)、キバネカミキリモドキ(甲虫目カミキリモドキ科)などでした。キバネカミキリモドキは幼虫のときには、主に針葉樹の朽木で生活し、成虫になると花に集まり、蜜や花粉を食べていると考えられているそうです。



キバネカミキリモドキ(2倍)

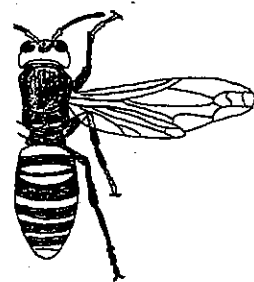
★ スズメバチに注意しよう

スズメバチ属のものは、私たちの周りでは5種で、よく見かけるのはケブカスズメバチ(女王 2.6cm、働きバチ 2.0cm)で木の枝や軒下などに巣をつくり、巣が大きくなればなるほど攻撃性が強くなるそうです。私たちはこのハチに恐ろしさを感じ、できれば駆除してほしいと思いますが、肉食で昆虫やクモなどを食べ生態系のバランスを保つ役割をしているといわれています。

スズメバチが刺すのは自分の巣を守るためです。そのため捕えたり、叩いたり、急な動きをしないことが大切です。数匹が体にまつわりつくときは近く巣があると考えて、来た道を静かにもどることです。

もし刺されたら、払い落とし踏みつぶし身を低くしてその場を速やかに離れ、水で冷やし、早く病院で手当てを受けることが大切です。

特に8月中旬～9月上旬、ハチの生息する森林などに入るときには、黒い帽子や黒い服などは避け、白い服装にしましょう。数年前、NHKの番組「ためしてガッテン」で実験的に試みていましたが、黒い布で覆った箱の周囲に集まって攻撃をくりかえしていました。



オオスズメバチの女王(0.7倍)

《 野幌森林公園もオオハンゴンソウが多くなって来ました 》

先日 7月25日 私たちの協議会では **オオハンゴンソウの防除を実施**

近年、この野幌森林公園も特定外来生物といわれている<オオハンゴンソウ>が急速に増えてきています。「刈り取り」などの方法もありますが、分布の拡大を防ぐのみで効果はあまり期待できないようで、根絶を目指して「引き抜き」を行いました。市民の参加者を含めて37人で約1万本を引き抜き、その抜いた根の部分は焼却処分してもらいました。今後とも根気よく続けていかなければならないと考えています。

*お詫びと訂正

自然観察「NOW」No43号、平成22年6月6日発行<ホウノキ>に関して以下のような誤った記事を書きました。「—そのため昆虫が集まって来て蜜を吸うことはいないので、虫による花粉の媒介はないようです。花粉はただ食べられるだけです。」→確かに、蜜腺がないので蜜を吸うことはできませんが、アオハナムグリなどは花粉を食べそれを体につけ運んでいます。花粉は媒介されています。

* 今回の「NOW」の原稿は、会員の谷口勇五郎さんの著作から多く引用させていただきました。



次回の観察会の予定 9月12日(日)「秋の花でにぎわう森を歩こう」
10時30分～14時30分 ふれあい交流館 集合

自然観察 NOW

野幌森林公園自然情報

平成 22 年度 No. 6

平成 22 年 9 月 12 日発行

北海道ボランティア・レンジャー協議会

その1 虫こぶとは？

虫こぶとは、虫などの寄生生物の影響で、何らかの刺激を受けた植物の一部が増殖したり肥大したり、分化に異常が生じたりしたもので、「虫こぶ」のほかに「虫えい」、「Gal1（ゴール）」とも呼ばれます。えいは **瘻** と書き、コブの意味です。

その2 虫こぶを作る犯人

ハエやハチ、アブラムシが虫こぶ全体の半分近くを占めるのですが、これらの昆虫のほかに、ガやダニ、菌類や線虫、ウイルスも（広い意味で）虫こぶを作ります。

※ダニ、菌類、線虫、ウイルスは虫(昆虫)ではないので広い意味での虫こぶ。

その3 虫こぶの名前のつけ方

規則的に名前がつけられていることが多く、

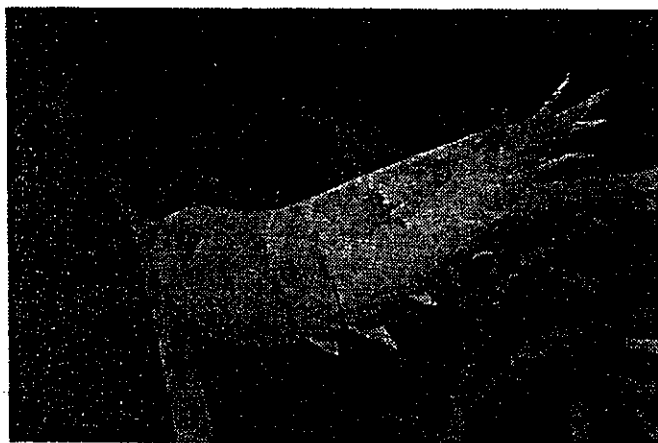
寄生植物名+虫こぶのできる場所+虫こぶの形(色)+フシ という順序になります。

最後の「フシ」は、「えい」のことで、つまり「こぶ」を意味しています。たとえば、「ブナハアカゲタマフシ」は、ブナの葉にできる赤い毛玉のような虫こぶ。「ハマナスメトゲコブフシ」は、ハマナスの芽にできるトゲのついたコブのような虫こぶ。

実物を見ていなくとも、どんな植物の、どんな場所にできる、どんな形（色）の虫こぶなのか想像できます。

その4 身近に見られる虫こぶ

野幌森林公園でも、あちこちで見られます。目立つ寄生植物は、オオヨモギ、ミズナラ、開拓記念館付近に植栽されているハマナスなど、沢山できています。チシマザサやクマイザサにも笹魚（ササウオフシ）と呼ばれる虫こぶができます（写真）。探してみましょう。



(HP「北海道の虫えい(虫こぶ)」から転載)

その5 虫こぶの意外な利用法

(1) 没食子(もっしょくし)と五倍子(ごばいし)

没食子は、中近東のナラやカシの芽に、インクタマバチが産卵してできた虫こぶを乾燥したもので、五倍子は、ヌルデの葉に、ヌルデシロアブラムシがつくことのできる虫こぶを乾燥したもので、どちらも50%以上のタンニンを含んでいます。タンニンは、茶やワインにも多く含まれています。渋柿の渋みもタンニンが含まれているからです。古くからインクの原料や皮のなめし、染色などに使っていました。今ではほとんど使われませんが、医薬品や化学薬品の製造原料として健在です。

(2) 虫こぶを食べる

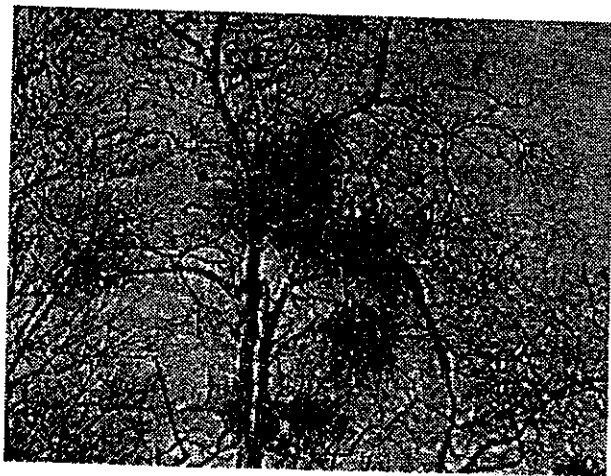
マコモというイネ科の多年草があります。マコモの茎に黒穂菌(くろぼきん)が寄生して、タケノコのように肥大したものをマコモタケと呼び、中に孢子ができる前に収穫し、中華料理の食材にします。タケノコとアスパラの間のような食感で、スープに入れたり肉の細切りと炒めたりして食べるそうです。一度食べてみたいなあ。

その6 てんぐ巣病

写真のように
なっている木を
見たことはあり

ませんか。似ているけどヤドリギではありません。これは、細菌の仕業で、「虫えい」ではなく、「菌えい」と呼びます。太い枝の一部から、小枝が密生して、鳥の巣(天狗の巣)のように見えます。多数の小枝が叢生(そうせい)して、箒(ほうき)状になることから英語で witch's broom(魔女のほうき)と呼びます。

※叢生 草木などが群がって生えること。



※参考文献 「虫こぶ入門」八坂書房

観察会の予定

- 10月14日(木) 「秋の森の匂いをかごう」観察会 10時15分～14時30分
北海道 開拓の村集合(交流館で昼食) 昼食持参
- 11月3日(水) 「晩秋の森観察会」(志文別コース) 10時00分～14時30分
野幌森林公園 自然ふれあい交流館集合(森林の家で昼食) 昼食持参
- 11月7日(日) 「秋のありがとう観察会」 10時00分～12時30分
野幌森林公園 自然ふれあい交流館集合 ごみ拾いをします

雪虫ってなあに？



【ユキムシ】トドネオオワタムシ【学名】Prociphilus oriens
【分類】カメムシ目 (hemiptera), アブラムシ科 (Aphididae)
【分布】北海道～本州、シベリア【大きさ】最大長さ4mm

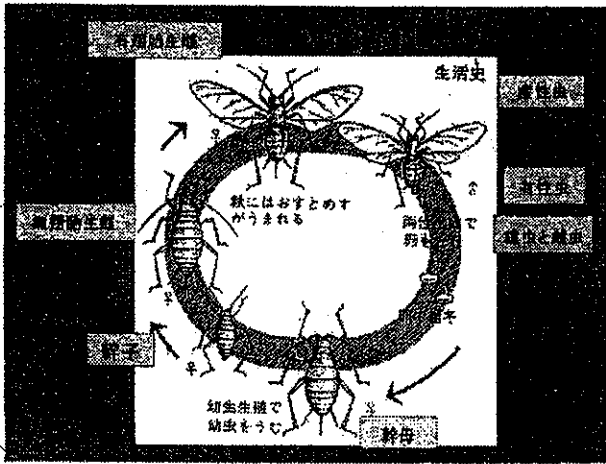
白腺物質を分泌する腺が存在するものの俗称。体全体が綿で包まれたようになる。雪虫という呼び方は主に北国での呼び名で、他に、綿虫・オオワタ・シーラッコ・シロコババ・オナツコジョロ・オウキコジョロ・ユキンコ・シロババ

その頃と、言っても大正4、5年のこと(一部略)だが、夕方になると、決まって村の子供たちは口々に「しろばんば、しろばんば」と叫びながら家の前の街道をあっちに走ったり、こっちに走ったりしながら、夕闇のたちこめ始めた空間を綿屑でも舞っているように浮遊している白い生き物を追いかけて遊んだ。素手でそれを掴み取ろうとして飛び上がったり、ひばの小枝を折ったものを手にして、その葉にしろばんばを引っ掛けようとして、その小枝を空中に振り廻したりした。しろばんばというのは「白い老婆」ということなのであろう。子供たちはそれがどこからやって来るか知らなかったが、夕方になると、それがどこからともなく現れてくることを、さして不審にも思っていなかった。

夕方が来るからしろばんばが出てくるのか、しろばんばが現れてくるので夕方になるのか、そうしたことははっきりとしていなかった。しろばんばは、真っ白というより、ごく微かだが青味を帯んでいた。そして明るいうちは、ただ白く見えたが、夕闇が深くなるにつれて、それは青味を帯んで来るように思えた。...

これは、井上靖の長編「しろばんば」の冒頭の一説です。しろばんばとは白い老婆のことで、本州の一部地方では「雪虫」をそのように呼ぶとのこと。

北海道ではユキムシ、雪虫の名で親しまれているこの虫は、正式名＝トドネオオワタムシというのですが、昆虫類有翅目アブラムシの仲間の昆虫で、北海道には10数種いるようです。彼らはアブラムシが植物の液汁を吸って生活するように、春と夏とで、寄生する植物を変えながら、樹液を吸って行きている生物。詳しく書くと、春にはヤチダモ類の葉裏で生活し、5月上旬頃に成熟した基母が処女生殖によりまた多数の♀を生むのです。またその♀も早熟多産で、次々に処女生殖を重ね、生まれた子虫は、数日間の蛹後、翅を持った成虫になり(これが第二世代)、この第二世代が7月頃にトドマツに移動し、卵を産み、夏の間はこのトドマツの根(トドネ)で、アリと共に生活しながら、第三世代の子虫＝♀を産卵。このトドマツで育った成虫が綿をつけてユキムシになるのです。つまり、この虫は皆、♀。そしてこの♀が、再びトドマツの木からヤチダモの木に移り(この飛ぶ様を私たちは見ている)緑色と、オレンジ色の子虫を生むのですが、ここでの緑色の子虫が初めてのみ。で、この緑のみの子虫は餌を取る口も持たないで、寿命はたった1週間ほど。そしてその間に♀がこのみと交尾し、越冬する1個の卵を残し、死亡し、一年を終える。北海道ではこの雪虫が飛ぶと初雪が降ると言われています。それは温度変化を感じていること+日の長さの変化、また雪虫の餌であるトドマツの養分が変化することが理由と考えられています。雪虫が飛ぶ日＝お天気が良い日。それは晩春の天気の場合、降雪日の前日や、2日前が最も天気が良く、暖かくなると言われているから、飛ぶ日は初雪間近というわけらしい。なお、ユキムシの白く見える部分は口ウの様な物質で、ユキムシが地面に居る時に、土や水分から身を守るためと、空を飛ぶ時にふわふわ濡いやすくするためにあると言われています。しかし、これは、繰り返しますが、アブラムシの仲間。飛ぶ姿は天使のようだが、実は害虫。でも、年々その数は減少気味になっている。初雪が降る、数週間前にヤチダモに一斉に引っ越しする雪虫(ユキムシ、トドネオオワタムシ)達風景＝北国ならではのものですね。



この図はアブラムシの完全生活環を表した図です。

トドネオオワタムシは完全生活環の部類に入ります。

アイヌ語でウパシキキリ。その意味は (ウパシ=雪、キキリ=虫)。

アブラムシの生活環は複雑で、産卵雌虫、雄虫、胎生雌虫など多数の生活型(モルフ)が出現する。産卵雌虫と雄虫が出現し、卵で越冬する世代を両生(有性)世代、胎生雌虫のまま単為生殖を繰り返す世代を無性(単為生殖)世代と呼び、有性世代と無性世代の両方をもつ生活環を完全生活環、無性世代のみからなる生活環を不完全生活環と呼んでいます。

完全生活環は気温7°C以下に下がる地域に、7°C以上14°C以下の地域には完全生活環のアブラムシと不完全生活環のアブラムシがあり、14°C以上の地域では不完全生活環のアブラムシとなるそうです。

歌や小説に出てくる雪虫

DREAMS COME TRUE おやすみのうた LYRICS.

雪虫と踊ろう 白い花の到着待って夜は 火の番をするからね 咳を鎮めてくれるようにたくさん
の想いを込めて 魔法を歌おう。La Do da Di, Do do De 目をつぶったら夢の中へ ベッドの気
球に乗って 飛んで黄金の ...

三浦綾子 氷点

雪虫がとぶころになった。啓造が函館から帰って、五日ほど過ぎた。北国では、雪の降る前になるときまって、乳色の小さな羽虫が飛ぶ。飛ぶというよりも、むしろ漂うような、はかなげな風情があって、人々は寒さを迎える前のきびしい構えが、ふっと崩されたような優しい心持になるのであった。中略

雪虫がひたと吸いよせられるように、啓造の合オーバーについた。うすいかすかな羽が透いて、合オーバーの茶がうつった。啓造は雪虫をソツとつまんだ。しかし雪虫は他愛なくベタベタと死んだ。それは一片の雪が、指に触れて溶けるような、あわあわしさであった。

(幸福とか、平和というのも、この雪虫のようなものだな)

雪虫飛来から初雪まで日数

エリア	昨年	一昨年
札幌	30日後	14日後
旭川	30日後	10日後
北見	31日後	3日後
函館	33日後	21日後

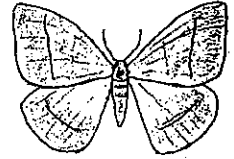
<平均> 34日後 17日後

自然観察 NOW

野幌森林公園自然情報
平成22年度 NO8
平成22年11月7日発行
北海道ボランティア・レンジャー協議会

〇〇 こんな寒い時季にチョウがいた・・・フユシヤク

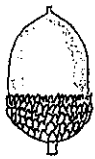
ある年の11月初め、温かい日の午後7時頃、近くの雑木林に行きました。風はなく、小道に近い木の幹を懐中電灯で照らしながら探すと、ミズナラの1mぐらいの高さに、フユシヤク（チョウのようなガの仲間）が1匹逆さに止まっていました。交尾しているところでした。ついに雌を見ることが出来ました。



フユシヤク
上:雄、下:雌
(実物大)

幼虫がシャクトリムシのシャクガ科には、日本に600種程いますが、そのうち、1～2月の厳寒期を除き、晩秋から早春にかけて成虫が現れるフユシヤク（冬尺）の仲間は北海道には20数種いるそうです。雌は羽が退化して歩くことしかできず、臭い（性フェロモン）を腹の先から出し、雄を呼び寄せ、交尾し食樹（ミズナラなど）に産卵します。羽の退化は寒さへの適応と考えられるとのこと。卵で越冬し、春に幼虫が現れ、初夏に土中でさなぎになり、冬に成虫が現れます。成虫は幼虫の時にたくわえたエネルギーを使って活動し、普通のガはできないのに、フユシヤクは氷点近い気温でも飛べるそうです。天敵（野鳥・コウモリ・肉食性の昆虫）の少ない時季に成虫が活動できるように進化したわけです。

〇〇 ドングリころころ・・・リスは害獣？



ドングリはしぶ味が強く、生や焼いても食べられません。1万年ぐらい前の縄文時代、大型の動物を食べつくし、人類の生存が危なかった時、ドングリを土器で煮るとしぶ味が取れて食べれたといひます。また、野生の動物ではクマ・リス・ネズミ・カケス・カラスなどの食料にもなります。

ドングリは親木の根元近くに落ち、発芽し、ある程度まで成長しても、大部分は成木になれないそうです。親木に光をさえぎられ、十分に光合成ができず、水や栄養分も親木に先取りされてしまい、おまけに、親の持つ害虫や病原菌がたやすく幼木に移ってきます。順調に成長するには親木から出来るだけ離れ、しかも乾燥に弱いので、土の中に入らないとうまく成長しません。ドングリが落ちてころがり、葉っぱの下に入ったぐらいでは、うまくいきません。北海道ではエゾリス・エゾアカネズミ・カケスなどはドングリを土の中に貯えて掘り出して食べる（貯食）習性があります。その中で食べ忘れたものが芽生えて育つわけです。リスやカケスは食べるだけでなく、種を遠くにまいて（種子散布）くれる働きもしているわけです。



〇〇 かわいいけれど食害が・・・ エゾシカ

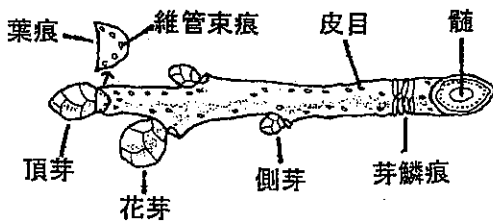
7月末、鹿公園（追分町）に行くと、囲いのエゾシカが20頭程、子ジカの乳を吸う様子がかawaii。12月、原野で雄ジカを先頭に数頭の姿を遠くから見ました。2月末、ある所のキャンプ場で、目の前に2頭のシカが出て来ました。雌でも私より充分大きく（少し身構えてすくみました）、小柄な方が従っていました。たぶん親子なのですね。



角は雄だけで、毎年春（4、5月）に根元から落ち、春～夏に生えるのは袋角（ふくろづの）といい、血管が通っています。秋には本物の枝角（えだづの）になり、角を立ち木にこすりつけるといいです。角は生後2年目から生えるそうです。秋（10、11月）は繁殖期で雄1頭が5～6頭の雌を従えとか。出産期（4、5月）、普通1子、子ジカは1年で独り立ちするそうです。最近道内のエゾシカが増え（推定64万頭）農林業の被害が深刻化しているといわれています。駆除に活用（肉や皮の）が追いつかない状況のようです。

〇〇 落葉広葉樹の名前を知る・・・冬芽

秋も深まり、葉を落とした落葉樹林は明るく、見通しも良くなり、野鳥も見やすくなります。また、夏とは違う樹木の姿に触れることができます。葉で樹木の名前をだいたい知ることができますが、冬芽でも出来ます。夏には殆どの樹木で特徴を持った冬芽が出来ています。葉だけでは名前を決めかねる場合でも、冬芽や枝の特徴から樹木の名前が分ることがあります。木の名前を知り、木に親しみましょう。



*冬芽（ふゆめ：とうが）

- 鱗芽・・・芽鱗のある芽・サクラ、ヤナギ
- 裸芽・・・芽鱗のない芽・ウルシ、ニガキ
- 葉芽・・・開いて葉と枝を作る芽
- 花芽・・・花のつぼみの中に持っている芽

〇〇 これからの自然観察会のご案内

期日・時間	行事名	集合場所	内容
11月23日(火)10:00～12:30	西岡水源地観察会	管理事務所前	野鳥・雪上物
1月16日(日)10:00～12:30	円山登山観察会	円山登山口	野鳥・冬を味わう
*2月13日(日)10:00～12:30	冬の森の観察会	ふれあい交流館	野鳥・雪上物
2月20日(日)10:00～14:30	藻岩山登山観察会	慈啓会登山口	野鳥・動物の足跡
*3月20日(日)10:00～12:30	森の中で春を探そう	ふれあい交流館	芽吹き・野鳥

お誘い合わせてご参加下さい。*印は自然ふれあい交流館との共催行事です。

平成 22 年度第 3 回役員会

平成 22 年 2 月 3 日 (木) 18:30~20:30 札幌エルプラザ 会議コーナー

欠席者:

1. 開会
2. 会長挨拶
3. 報告事項

総務部

1. 会員動向・・・退会者、入会者
育成研修会における新会員：11名、道名簿による入会 新会員：4名
2. 12月4日(土)「ボラレン忘年会」の参加者 29名
3. 研修会案内状の送付、道名簿による会員勧誘(石狩地区)

研修部

後期の観察会、育成研修会等について

(1) 観察会(9月~1月)

月 日	天気	観 察 会 等	会 員	一 般
9月11日(土)	晴れ	「秋の花でにぎわう森を歩こう」下見	13名	
9月12日(日)	晴れ	「秋の花でにぎわう森を歩こう」	12名	79名
10月7日(木)	晴れ	「秋の匂いをかごう」観察会 下見	6名	
10月14日(木)	晴れ	「秋の匂いをかごう」観察会	17名	100名
11月2日(火)	雨	「晩秋の森」観察会(志文別線)下見	8名	
11月3日(水)	雨	「晩秋の森」観察会(志文別線)	10名	5名
11月6日(土)	晴れ	「秋のありがとう」観察会 下見	10名	・
11月7日(日)	晴れ	「秋のありがとう」観察会	13名	54名
11月22日(月)	晴れ	「西岡水源地自然」観察会 下見	9名	
11月23日(火)	晴れ	「西岡水源地自然」観察会	9名	8名
1月15日(土)	晴れ	「円山登山」観察会 下見	6名	1名
1月16日(日)	曇り	「円山登山」観察会	6名	7名

1月22日~23日 鶴川研修会 参加者希望者が少ないため中止

(2) 育成研修会(育成研修会担当役員 菅 美紀子)

1. 8月7日~15日 育成研修会協力者の選定、協力要請(菅美紀子)8月初旬~中旬
2. 8月20日 育成研修会協力者会議 9月9日を設定(事務局)ハガキ送付(17名)
3. 9月2日の第2回役員会議にて会長挨拶(佐藤)、自然について(宮本)、プログラム作成(五十嵐)、ボランティアレンジャーについて(春日)を決定したが後日、宮本氏が緊急入院のため、自然について(五十嵐)プログラム作成(小林)に変更した。
4. 9月9日 育成研修会協力者会議 「野外実習」観察会、グループアシストの担当者、模擬解説の担当者の5名とテーマを決定した。
5. 10月1日(金)~3日(日) 育成研修会 受付時は30人の定員が、直前のキャンセルがあり、受講者は22人になってしまった。22名の受講者に対し、ボラレン協力者17名、自然ふれあい交流館のスタッフ5名が対応した。

6. 11月4日 18:00~20:00 「ボレール」にて育成研修会の反省会が行なわれた。(菅美紀子)
受講者の人数の直前減少の問題、地方開催、宿泊研修、今年受講者について

広報部

(1) エゾマツの発行・送付

エゾマツ94号(秋)の発行 10月25日

エゾマツ95号(冬)の発行 2月 2日

(2) 自然観察 NOW の発行(野幌森林公園の共催観察会にて配布)

自然観察 NOW 9月12日(日)5号(五十嵐)

自然観察 NOW 10月14日(木)6号(小林)

自然観察 NOW 11月 7日(日)7号(谷口)

ボラレン展実行委員会(熊野・田村・内山 春日)

ボラレン展 場所 NHK ギャラリー 日時 9月17日(金)~22日(水)10:00~18:00

★9月17日NHKのテレビ番組「北カフェ」(11:30~)にて2分間、ボラレン展について紹介される、春日会長が出演。

★展示期間中の展示場の開錠、管理の当番を11名で行なう。展示中の来場者315名

(作品の搬入16日13:00~15:00 作品の展示準備 16:00~18:00 作品排出22日15:00~)

事務局(室野文男・内山恭子)

(1) 江別市立対雁小学校4年生総合学習の観察会について(エゾマツ94号を参照)

1. 8月19日、ガイド要請をする(メーリングリスト、電話、ファックス)。

2. 学校担当者との打ち合わせ 総合学習要領をガイド担当者へ配布、コース、時間配布などの打ち合わせを行なう。

3. 9月10日 生徒112名に対し、12名のガイドを配置した。自然ふれあい交流館の混雑を防ぐために2コースを設定。

(2) 9月29日 クリーンクリーン野幌森林公園「清掃活動」の参加要請をメーリングリストで行う。10月7日までに参加者を道立野幌森林公園管理運営協議会へ提出、10月14日(木)は「秋の匂いをかごう」観察会と重複するために5名にお願いした。

(3) 10月6日、育成研修会での新会員に観察会の案内とメーリングリストへの参加要請をハガキにて行いました。その結果、國吉、矢村、伊藤(清)、大藤、藤巻、辻本、新谷の7名の参加がありました。

(4) 10月14日「クリーンクリーン野幌森林公園」、「秋の匂いをかごう」観察会が同じ日になり、江別市立江陽中学校1年 30名が「秋の匂いをかごう」観察会に参加することになったので、メーリングリストで会員の参加状況を流し、参加要請を行なった結果 会員17名が参加 一般参加者70名、中学生30名 計100名のガイドを無事終了することができた。

(5) 道の環境推進課のボラレン名簿の活用について。(10月29日~11月18日)

協議会の会員でメールアドレスを持っている人へ、メーリングリストへの参加を呼びかけました。その結果、木村(伊達市)、岡村(七飯町)、勝見、須田、樋口、門村(鶴川)、小山内(鶴川)、山本(北広島)、富永(苫小牧)、石山、今村の11名の参加がありました。

日の水曜日に行なう。(4月、8月、10月)

②共催、8月の「夏の森」観察会は従来の開拓の村集合～瑞穂の池解散を變更
開拓の村集合～開拓記念塔(昼食)～瑞穂の池～開拓の村解散

③主催 7月「初夏の森」観察会は従来大澤口集合の観察会を登満別「森の家」集合へ

④主催 2月「藻岩山登山」観察会は第2回役員会議にて廃止

(3) 23年度研修会計画について(春日会長、小林研修部長が計画中)

1. アポイ・様似研修会

目的 高山植物の圃場の笹狩りをする、かんらん岩地帯の植物について研修する

期日: 6月18(土)・19(日)日

宿泊: アポイ岳学術支援センター

日程 ①18日 午後1時 アポイ岳学術支援センター集合
高山植物圃場のササ刈り

②19日 かんらん岩地帯の植物研修

幌満川の上流に向けて車で移動しながら研修する

※ガイドが1名ついてくれる。アポファンクラブからか、町からか不明

事前 ①教育長宛に施設使用承認願提出

②教育長宛田中さんの講師派遣願提出

事後 教育長宛に礼状の発送

2. 東大演習林研修

窓口: 東大演習林庶務係の山下さん

電話: 0167-42-2111 内線12 #

①実施日: 7月14・15・16日でお願いした。土日は受けられないとのこと。故に、日にち決定もこれから

※宿泊: 富良野の旅行業界からの申し入れがあり、申込書に記載された研修目的を見て検討する

※とにかく、申込書を出さないと話が出来ないと言うことです。近いうちに、申込書を作成提出します。ただし、来年度のことは、3月にならないと、と言っていますから、ずれ込みます。会員への周知は、慎重にしましょう。

※富良野の南部さんの助力も必要になることでしょうか。この点については小林さんに働いてもらいます。

3. 鶴川研修について

①実施日 月日: 8月20・21日(土・日)

①目的 浜植物の研修 ②野鳥観察(シギ・チドリなど)

4. 当別道民の森「きのこ」研修会、(内山が計画中)

定員 10名、2回 8月～9月に講師は松原健一氏に依頼

(日時は未定、4月以降に決定)

5. 研修の場としての観察会下見会について、本年度から話題提供者を設定して下見会を充実させる。(内山が計画中)

現在のメーリングリストへの参加者は52名です。

役員（15名）

春日順雄、佐藤清一 五十嵐一夫、小林英世、室野文男、三崎 篤 伊藤秀平、熊野美子、
内山恭子、松井玲子、安倍 隆、中林光司、今村ひろ子、菅美紀子 田村允郁

一般会員（34名）

宮本健市（千歳）、松本亜由美、加納勝義、南部栄一（富良野）、宮田和恵（富良野）、原田
和彦、中西俊雄、阿部忠、伊藤朋子（名古屋）、池田政明、道場優、滝村大輔、小川彰太、三
浦治彦、千葉到、荻野裕子、伊藤清治、國吉守、辻本理佳、矢村勢津雄、大藤幹 藤巻光彩、
木村益己（伊達市）、岡村敏夫（七飯町）、勝見捷子、須田節、樋口達郎、門村徳男（鶴川）、
新谷幸嗣（苫小牧市）、小山内恵子（鶴川）、山本律子、富永まゆみ（苫小牧市）、石山浩一、
今村衛

自然ふれあい交流館（2名） 扇谷真知子、濱本真琴

道庁・環境推進課（1名） 林 由美子

(7) 道からの名簿に基づいて、入会の勧誘活動（石狩地区名簿掲載者）を行なう。

（三役・部長協議）

(8) 来年度の事業計画案の策定、役員会議のテーマについて協議（会長、事務局）

11月30日、10:00～12:00 自然ふれあい交流館 観察会・役員会議の日時の決定

12月14日、10:00～12:00 自然ふれあい交流館 会員の研修について

1月 7日、10:00～12:00 自然ふれあい交流館 第3回役員会議について

(9) 総会、役員会議の会場設定について（内山）

1月15日 総会の会場、札幌エルプラザの環境研修室の抽選にて会場を確保（内山）

総会予定「4月16日（土）」13:00～16:30

4. 協議事項

23年度事業計画

(1) オオハンゴンソウの防除について（別資料 実施計画書、防除従事者名簿）

当会が自然環境保護に直接に関わる市民参加型のボラレン活動であり、継続する予定で環境省に
更新手続きを行なう準備を行なっています。

オオハンゴンソウの防除は当会が実施計画書等を提出し環境省から認定をもらっている主体事
業であり、防除従事者証の交付など大きな権限と責任を伴う事業です。

当会の事業に土地所有者である石狩森林管理署ふれあいセンターや開拓記念館、江別市環境部廃
棄物処理課の協力を頂いて行っている事業です。

申請書類の中で実施計画書は法律に沿う内容にでなければ許可（認定）を得ることができません、
年に1回のイベントを行うだけの事業でも内容はボラレンの活動としては不可能に近いものがあ
ります。

★初年度の場合は防除従事者の名簿の提出がなかったのですが認定の更新に伴う防除従事者名簿
提出があり、この名簿に記載するメンバーをどうするか？

1. 平成21、22年度に防除に参加した会員、2. ボラレン役員 3. ボラレン加盟の会員全員。

(2) 23年度観察会計画について（春日会長、室野、内山）

①共催の平日木曜日の観察会下見について、従来1週間前の木曜日に設定した下見を観察会前

4月20日、11月22日の下見会について話題提供者 道場 優氏 「野鳥」。

下見会の話題提供者として 宮本健市氏 「昆虫」、日程は未定だが了承済み。

(4) 育成研修会

実施日 平成23年10月21日(金)～23日(日)

(紅葉の時期と自然観察会実施時期を踏まえて最適な時期として設定・・・ふれあい交流館)

(3) ホームページの維持管理について(現在 室野が管理)

1. 田村顧問が作成したホームページの観察会予定の内容更新方法
2. メールサーバー(プロバイダー)へのダウンアップの方法
3. 田村顧問の登録したメールサーバーの登録解除を行うのでホームページアドレスが変わります。

(2月末日まで現在のアドレス、3月以降は事務局 室野のプロバイダーに移転します。)

<http://volaren.sakura.ne.jp/>(現在) → → → <http://hokkaidou.me/volaren/>(移転)

※このような問題は事務局(ホームページ管理者)が変更することに生じる。

4. 後継者の育成が必要(管理者がいなくなった場合の対応)

(4) メール・メーリングリストの活用について、(メーリングリストは室野が登録管理)

観察会の報告や参加要請について本年度は有効に活用できたのではない。電話、ハガキなどは有料であり、印刷等に手間がかかるがメールは時間を気にすることなく発信できる。現在、会員の約1/3がメールで連絡できる状態にあり、役員の大部分がメールによる連絡ができる状態にある。役員会議の議題等もメール連絡を活用させ、決め細やかな運営ができる。

(5) メーリングリストの利用できない人への対応、「広報誌 エゾマツ」、ハガキなどの連絡の外に観察会や忘年会等の会員の集まる機会に「事務局だより」として印刷物を配布する。

(6) 広報活動について

1. ボラレン展の当番を行なっていて一般市民にはボラレン活動が認知されていないことが分かった。
2. チラシの内容について、事務局への問い合わせは交通機関や会員でなければ参加できないのか等の問い合わせが多い。チラシの内容について自然観察協議会のパンフには交通機関について詳細に乗っている。内容について一般参加者にわかりやく観察会の案内状を作成する。
3. PR活動の効果についてはアンケートや観察会などで参加者に関かないとわからない。
4. 野幌森林公園の観察会については共催が多く、開拓の村が多くのチラシを配布している。
5. 観察会参加者は天気により左右されることが多い。雨の日は人数が少なくなる。

(7) 道の名簿による会員の勧誘活動について(春日)

石狩地区(完了)、小樽・オホーツク支部、鶴川、富良野地区も予定、
支部の立ち上げについて旭川、帯広に支部結成予定

(8) 観察会の下見後の花会合わせが実施率ゼロ状態、原因はなにか、放置するとマンネリ化する。

(春日)

(9) 総会の日程、準備(別資料 過去4年の事業計画案)

事業方針等の確認

平成23年度 事業計画案(役員会議用)

月	行事名	実施月日	下見	集合・解散場所	備考	当番
4	第4回役員会議	11日(月) 18:30~20:30		エルプラザ2F会議コーナー		
	平成23年度総会・研修・懇親会	16日(土) 13:00~16:30		エルプラザ2F環境研修室	研修講師 小樺 北原氏	
	春の花を見つけよう	21日(木) 10:00~12:30	20日(水) 道場優	交流館集合・解散	共催	昼食持参自由
	セイヨウオオマルハナバチの防除	30日(土) 10:00~12:30	29日(金) 21	開拓の村入口 エゾムラサキツツジ	主催	道の防除確認 申請(更新)
5	第1回役員会議	6日(金) 18:30~20:30	???	エルプラザ2F会議コーナー		
	春のありがとう観察会	8日(日) 10:00~14:30	7日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食・ごみ袋・ 軍手持参
	恵庭公園観察会	22日(日) 10:00~12:00	21日(土)	恵庭公園駐車場集 合・解散	主催	昼食持参自由
	三角山登山観察会	29日(日) 10:00~14:00	28日(土) 21	緑花会館登山口集 合・解散	主催	昼食・飲料持 参
6	森の新緑観察会	5日(日) 10:00~12:30	4日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参自由
	北広島レクの森観察会	12日(日) 10:00~12:30	11日(土) 21	レクの森入口集合・ 解散	主催	昼食持参自由
	エゾマツ97号の発行	○	21	エルプラザ印刷室		
	アポイ・様似研修会	18日(土)~19 日(日)		アポイ研修所	主催	アポイ岳フ ンクラブとの
7	初夏の森・登満別観察会	3日(日) 10:00~12:30	2日(土)	登満別駐車場、カラ マツコース、樹木園	主催	昼食持参自由
	芸術の森周辺観察会	10日(日) 10:00~12:30	9日(土)	芸術の森停留所前 集合	主催	昼食持参自由
	富良野研修会	日程未定 7月中旬以降		富良野東大演習林		土日は難しい
	オオハンゴンソウの防除	24日(日) 10:00~12:30	23日(土)	交流館集合・解散	主催	防除認定の経 験 申請手續
8	夏の森の観察会(瑞穂の池)	4日(木) 10:15~13:30	3日(水)	村集合・解散 記念 焼(昼食)	共催	昼食持参
	轟川研修会	20日(土)~21 日(日)		むかわ町四季館		ネイチャー研 究会inむかわ
	当別道民の森「きのこ」研修会	8月~10月日時 未定		当別道民の森		松原健一担当
9	第2回役員会議	2日(金) 18:30~20:30		エルプラザ2F会議コーナー		
	育成研修会協力者会議	○		エルプラザ2F会議コーナー		
	秋の花でにぎわう森を歩こう	11日(日) 10:00~14:30	10日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参
	エゾマツ98号の発行	○		エルプラザ印刷室		
10	秋の森の匂いをかごう	13日(木) 10:15~14:30	○	村発着(交流館昼休 憩)	共催	昼食持参
	北海道ボランティア・レン ジャー 育成研修会	21日(金)~2 3日(日)		交流館・野幌森林公 園内	共催	
11	晩秋の森観察会志文別コース	3日(木) 10:00~14:30	2日(水)	交流館集合・解散	主催	昼食持参
	育成研修会反省会	○		○		
	秋のありがとう観察会	13日(日) 10:00~12:30	12日(土) 道場優	交流館集合・解散	共催	ごみ袋・軍手・ 昼食持参自由
12	西岡水源地自然観察会	23日(水) 10:00~12:30	22日(火)	管理事務所前集合・ 解散	主催	
	忘年会	日程未定 3.10.17(土)		○		
1	円山登山観察会	15日(日) 10:00~12:30	14日(土)	円山登山口集合・解 散	主催	
	エゾマツ99号の発行	○		エルプラザ印刷室		
	第3回役員会議	27日(金) 18:30~20:30		エルプラザ2F会議コーナー		
2	冬の森の観察会	12日(日) 10:00~12:30	11日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参自由
3	エゾマツ100号の発行	○		エルプラザ印刷室		
	森の中で春を探そう	25日(日) 10:00~12:30	24日(土)	交流館集合・解散	共催	昼食持参自由
4	第4回役員会議	13日(金) 18:30~20:30		エルプラザ2F会議コーナー		

編集後記

- ・表紙は熊野美子さんが「厳冬の屈斜路湖」をスケッチしたものです。
- ・今年も力をあわせて元気で活動しよう。4月からの今年度の活動も、昨年と同じく観察会、育成研修会、調査活動、外来種の防除などを実施していきたい。今年で3年目をむかえるオオハンゴンソウ防除は、市民の多くのみなさんにも参加してもらって大きな運動にしていきたい。
昨年の名古屋での生物多様性に関する国際会議で、外来種の防除によって在来種を守り育てることが生物多様性を維持するためにとても重要である、と再確認されています。
- ・自然ふれあい交流館との共催事業で、その季節に関する情報を「NOW」に掲載してきました。そこで5号〜8号を載せてみます。一昨年まで田村元会長が孤軍奮闘され、とても味わい深い「NOW」を発行されました。今年度からは広報部が担当することになり、原稿を会員のみなさんに願ひし、個性的な「NOW」を発行することができました（私を除いて）。
執筆者は、5号は佐藤、6号は五十嵐さん、7号は小林さん、8号は谷口さん。
なお、ここには掲載していませんが1、2、4号は春日さん、3号は佐藤。
- ・次回の「エゾマツ」の発行は3月末を予定しています。3月15日まで広報部、北広島島の佐藤まで原稿をお願いします。会員の皆さんからの寄稿を待っています。

エ …… 永劫に続けてほしいウレシパモシリ
ゾ …… 存外知らないところで自然は傷つき
病んでいるよ
マ …… まだまだ調査、対策が足りないね
ツ …… 常（つね）日ごろから気を配って
いかないよ

*ウレシパモシリ アイヌ語で、万物がお互いに育てあう大地の意。



「エゾマツ」 2011年2月2日 発行
95号 2010年度 冬季号
会長 春日 順雄